

大学コンソーシアム学都ひろさき

令和元年度
活動報告集





ごあいさつ

弘前は６高等教育機関をはじめ，多くの高等学校などが存在する文字通りの学都ですが，単に学生が多いだけでなく，弘前は「学都」と呼ばれるに相応しい風格のある街だと，他の街との比較ではなく，そう思います。加えて，学生は自転車があれば何処にでも行くことができ，「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動も弘前ならではの利点を活用して一層活発になるものと期待しています。

弘前の利点はそれにとどまるものではありません。弘前市からはコンソーシアムの活動に予算面や活動面での支援をいただいており，また，市民の皆さんの多大な協力をいただいています。なにより，大学に対する市民の期待にも大きなものがあると思いますので，大学としても地域との連携による教育研究の在り方を追究することに大きな価値を置いています。

いつも申し上げていることですが，特に大学における教育研究は多様でなければなりません。一大学の努力だけではなく，コンソーシアムを主体として地域の自治体や企業，団体の皆さんと連携して活動できることは，「学都ひろさき」に拠点を置く私たち６高等教育機関にとって大きなアドヴァンテージです。そのことを最大限に活用して，未来社会を担う人材の育成に邁進していければと願っています。

「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動を多くの方々に知っていただいて，引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



令和２年３月

大学コンソーシアム学都ひろさき会長

国立大学法人弘前大学

学長　佐藤　敬

目　次

ごあいさつ

令和元年度活動報告

Ⅰ．教育事業

●共通授業　・・・・・　1

○インターンシップ受入　・・・・・　26

●学生地域活動支援事業

・弘前大学アカペラサークル V.E.L　Winter　Live 事業　・・・・・　30

・囃子で地域活性化大作戦！　・・・・・　35

・弘前大学ストリートダンスサークル A.C.T. 定期公演『STEP vol.12』　・・・・・　38

・インクルーシブを意図したバスケットボール教室　・・・・・　40

・弘前市内教育機関に勤務する養護教諭等を対象とした
救急救命(プレホスピタル）に関する研究・調査事業　・・・・・　42

・成果発表会　・・・・・　47

Ⅱ．連携推進事業

●６大学合同シンポジウム　・・・・・　53

●各大学公開講座等助成事業

・２０１９年度旧弘前藩藩校稽古館資料調査報告会　・・・・・　61

・令和元年度弘前大学ボランティアセンター市民ボランティア講座　・・・・・　62

・放送大学青森学習センター公開講演会「地元のリーダーに学ぶ講演会」　・・・・・　64

・弘前藩の古武術　・・・・・　65

・東北女子大学公開研究会「『個』の尊重と学校教育２」　・・・・・　67

・青森県産食材を使った料理作品展　・・・・・　69

Ⅲ．学生交流事業

●学生団体シンポジウム～６大学 と 学生１万人 が弘前をつくる～　・・・・・　71

●弘前市長と加盟大学学生との懇談会　・・・・・　86

○ひろさき移動キャンパス　・・・・・　91

●学生委員会「いしてまい」活動　・・・・・　93

●「平成３１年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金」対象事業
○大学コンソーシアム学都ひろさき自主財源実施事業

令和元年度活動報告

Ⅰ．教育事業

共通授業

１．共通授業とは

「地域の課題を理解し，地域の発展を考える」をテーマに，地域の課題を具体的に理解し，その解決について自ら考えることが出来る人材を育成することを目的に，平成２５年度から開講している，オムニバス形式の授業である。

平成２８年度から，本コンソーシアム加盟大学の弘前学院大学，東北女子大学，弘前大学の３大学で，「授業の単位化」が開始した。

２．概要

○テーマ

地域の課題を理解し，地域の発展を考える。

○目的

地域の課題を具体的に理解し，その課題解決について自ら考えることが出来る人材を育成する。

○内容

１日１課題（テーマ）について，担当教員，弘前市職員，民間企業社員から，地域の様々な課題についてオムニバス形式で授業を実施し，その解決策についてのグループディスカッション，グループワーク，フィールドワーク等を行い，発表する。

○対象・定員

弘前学院大学，東北女子大学，弘前大学の学生５５名

○日時・授業数

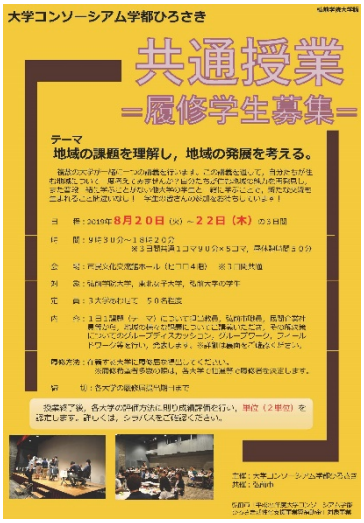
令和元年８月２０日（火），２１日（水），２２日（木）

９時３０分～１８時２０分

１５コマ（１コマ９０分×５コマ×３日間）

○会場

ヒロロ４階　市民文化交流館ホール（３日間共通）



令和元年度の募集ポスター

３．受講者数

	２０日	２１日	２２日
弘前学院大学	１０名	９名	９名
東北女子大学	５名	５名	５名
弘前大学	３１名	３１名	３１名
聴講生（一般）	０名	０名	０名
計	４６名	４５名	４５名



令和元年度の受講者

４．各日の授業

（１） ８月２０日（火）

テーマ	青森の地域生活課題～生きづらさを抱える人との関係づくり～
概要	厳しい経済情勢におかれる青森県では生活に課題を抱える人への支援に力が入れられています。様々な事例から日常生活に困難を抱えている人の存在と背景を学びます。「伝える技術」と「聴く技術」を体験的に学習することを通して，地域課題に対して私たちにできそうなことを考えます。
担当教員	弘前学院大学　社会福祉学部　教授　　小川　　幸裕
自治体講師	弘前市健康こども部こども家庭課　主事　　小池　　理　氏 弘前市福祉部障がい福祉課　社会福祉主事　　三上　佑佳子　氏 弘前市福祉部介護福祉課　社会福祉主事　　石岡　　丞　氏
協力教員	弘前大学　人文社会科学部　教授　　森　樹男 東北女子大学　家政学部　准教授　　小野　昇平
授業の流れ	【１コマ目】９時３０分～１１時００分 ・導入（自己紹介） ・グループワーク① 「私のまちで困っている人ってどんな人？どんな支えが必要？」 ・講義 「地域で生活に課題を抱える人を支援するとは～人と環境との関係の視点から～」
授業の流れ	【２コマ目】１１時１０分～１２時４０分 ・導入 ・シンポジウム―講話①　事例紹介 弘前市福祉部障がい福祉課　社会福祉主事　三上　佑佳子　氏 （身体に障害を抱えている人，知的・精神に障がいを抱える人） ・シンポジウム―講話②　事例紹介 弘前市福祉部介護福祉課　社会福祉主事　石岡　丞　氏 （認知症を抱える人，高齢により支援が必要な人，貧困の問題を抱えている人） ・シンポジウム―講話③　事例紹介 弘前市健康こども部こども家庭課　主事　小池　理　氏 （子育てに難しさを抱えている人） ・グループワーク② （講話を聞いての感想，意見，について模造紙に書き出し，グループ単位でまとめ，発表する。） ・全体ディスカッション （講演者２名に対してグループ内ででた質問を発表，フィードバック）

授業の流れ	【３コマ目】１３時３０分～１５時００分 ・講義 「支援が必要な人との関係づくりとコミュニケーション」 ・演習① 「伝える技術～図形伝達ゲーム～」 （①伝達者が口頭のみで手元の図形をグループメンバーに伝える。伝達される側は質問することはできない。②終了後，どのくらい正確に描けているか確認し，正確な情報を伝達するためにどのような工夫が必要か検討し，発表する。③双方向からのコミュニケーションやジェスチャーを用いりながら同じ図形を描いてみる。④全員が同じ図形を描けているか確認する。） ・ディスカッション 「演習で得た気づき」
	【４コマ目】１５時１０分～１６時４０分 ・導入 ・演習② 「聴く技術～カレーの作り方～」 （①２人１組になり，カレーの作り方を“教える人”と“教わる人”に分かれる。②“教わる人”は“教える”人に向かって「カレーライスの作り方を教えてください」と相談する。時間制限は３分以内。③数組にどのようなカレーを教わったかを発表してもらう。） ・講義，模擬ロールプレイ （小川教授と小野准教授による模擬ロールプレイ，三上氏と石岡氏による模擬ロールプレイ） ・グループワーク④・発表・まとめ 「演習で得た気づき」
	【５コマ目】１６時５０分～１８時２０分 ・グループワーク⑤ 「私たちにできそうなこと？」 （１コマ目で実施したグループワークと同様の内容についてグループ内で考察する。） ・発表 ・まとめ
	＝＝青森の地域生活課題を知る＝＝  「私たちの地域で生活に困っている人ってどんな人？」というテーマについて各グループで意見共有をした。

授業の様子

「地域で生活に課題を抱えている人をどう支援していくべきか」を講演する小川先生



＝＝シンポジウム＝＝



三上　佑佳子　氏による講話

〈講話内容〉
障がいを抱える方の事例紹介
①身体に障害を抱えている人
②知的・精神に障がいを抱える人

（講話内容）
介護が必要な人の事例紹介
①認知症を抱える人
②高齢により支援が必要な人
③貧困の問題を抱える人



石岡　丞　氏による講話



小池　理　氏による講話

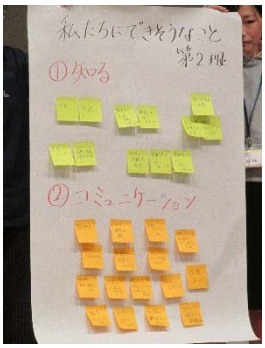
（講話内容）
子育て支援の事例紹介
①子育てに難しさを抱えている人

相談者の本当に解決すべき問題の，相手のプライバシーに配慮した話の聞き方等について確認した。



三上氏と石岡氏による
ロールプレイの様子

授業の様子	＝＝伝える技術～図形伝達ゲーム～＝＝  ①伝達者は伝達される側の人たちに言葉だけで図形を伝える。（1回目はジェスチャー・非言語的コミュニケーション・質問禁止） 伝達者は複雑で情報量の多い図形を伝えることで，相手にうまく伝わらないストレスを体感した。  ②2回目は双方向のコミュニケーションをはかりながら同じ図形を書いてみる。  1回目より意思伝達が上手くいき，手本通りの図形を書けた人が増えた。 ＝＝聴く技術～カレーの作り方＝＝ ① カレーライスの作り方を“教わる人”が“教える人”に相談する。   カレーの作り方を相談する様子

授業の様子	②どのような作り方を教わったか，数組が発表。 食べたいと思ったカレーを伝授してもらえたペアが多かった。  丁寧に作り方を教えるペアや，“説明書通りに作ればOK！”とアドバイスするペアも。  どんなカレーを作りたいですか？と相手の要望を詳しく聞いていく。 小川先生と小野先生のロールプレイ ＝＝地域共生社会の実現に向けて私たちにできそうなこと＝＝   「私達に何が出来るか？」をグループごとに意見を出し合って模造紙にまとめていく   「自分たちにできそうなこと」について発表する様子

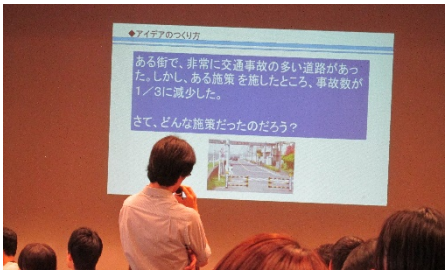
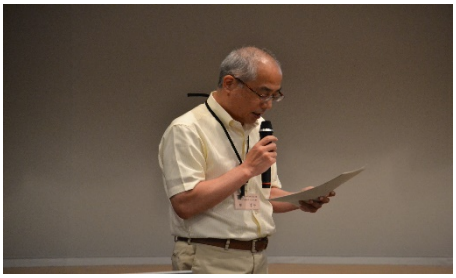
	 相手の気持ちをくみ取ろうとする内容が多く、知る・聴く・理解することが重要だとまとめているグループが多かった。
まとめ	1 日目ということで学生には緊張が見られ，自己紹介やアイスブレイクでは手探りな様子が伺えた。しかしグループワークを重ねていくことで，午後には学生同士が談笑しながら話し合いに励む姿が見られ，積極的に意見を出すことが出来ていた。 最初に行ったグループワークでは「私たちの地域で生活に困っている人ってどんな人？」というテーマについて，様々な意見を出し困っている人のイメージを構築していった。それにより，最後のグループワークでは「私達にできそうなこと」を自分事として考え，具体的な案としてまとめられていた。「あいさつをする」,「困っている人の話を聞く」といったコミュニケーションを大事にする発表が多く見られ，特別なことではなく身近ですぐ出来ることに気付けたようだった。 この授業を通して,学生たちは地域で様々な課題を抱えている人の存在に気付くことが出来た。その上で彼らの話をどのように聴き,生活が改善するよう伝えるかを学習し,地域生活課題を抱える人に向き合う姿勢を構築していった。困っている人がいる時にどのようにしてコミュニケーションを取るか,その手段の多様性や必要性について学ぶことが出来たようだった。学生たちにとって，普段触れないような問題を体験的に学習し,解決策を模索することは良い機会であったと感じる。

分責：大友　柚紀（インターン生）

（２）　８月２１日（水）

テーマ	若者の政治参加
概要	全国的な（青森県では特に）投票率の低さ，特に若い世代の投票率の低さを受け，今，若者の政治参画が叫ばれている。令和元年５月には青森県議会議員選挙，青森県知事選挙，７月には参議院選挙が行われた。そこで若者の政治参加の重要性を，根源にさかのぼって考えてみる。
担当教員	弘前大学　教育学部　　講　師　　蒔田　　純
自治体講師	弘前市選挙管理委員会事務局　　総括主幹　笹　　淳平　氏

協力教員等	弘前大学　人文社会科学部　教　授　森　樹男 弘前学院大学　社会福祉学部　教　授　小川　幸裕 東北女子大学　家政学部　准教授　小野　昇平
授業の流れ	【１コマ目】９時３０分～１１時００分 新しいアイデアの作り方,選挙についての基礎的な知識を学ぶ ・アイスブレイク ・アイデアの出し方 （自治体や空港などで問題解決のために実際に出されたアイデアをクイズ形式で紹介） ・弘前市選挙管理委員会事務局　総括主幹　笹　淳平　氏の授業 （選挙制度の歴史，青森県における国政選挙の投票率，投票率向上のための弘前市の取り組みとその効果，投票することの意義）
授業の流れ	【２コマ目】１１時１０分～１２時４０分 ゲームで言葉での説得の難しさを学ぶ ・アニメ動画鑑賞 （先生が小学生向けに作った選挙動画を鑑賞） ・政治家追い出しゲーム （５つの政策から１番お金をかけるべき政策について議論し，発表した。）
	【３コマ目】１３時３０分～１５時００分 自分の行動と照らし合わせて選挙について考えよう ・グループワーク （５月の青森県議会議員選挙,青森県知事選挙,７月の参議院選挙に行ったか,行かなかったか,その理由は何か？若者の投票率が低いのはなぜか？） ・各班発表
	【４コマ目】１５時１０分～１６時４０分 若者の選挙参加について考えよう ・グループワーク （どうすれば若者は選挙に行くようになるか，若者の投票率向上のための重点施策２つを決定）
	【５コマ目】１６時５０分～１８時２０分 模擬選挙 ・ジグソー法に則り新たなグループで意見交換 (最初の班で決めた重点政策について他の班の人と意見交換) ・元のグループで，それぞれもらった意見を共有,修正 ・重点施策を各班発表 ・投票－開票－結果発表 ・講評，総括

授業の様子	 「若者の政治参加」を担当する 蒔田先生 アイスブレイク 「私実は…〇〇なんです。」 という自己紹介で意外な一面 に驚く学生  ＝＝新しいアイディアの作り方＝＝ 鉛筆＋消しゴムや五角形に形を変えた合格鉛筆など多様な鉛筆があることから，既存のモノをかけ合わせたり，ある部分だけを変化させるなどアイディアの出し方は様々ある。そのことを念頭に置き，実際に不法投棄に悩む自治体が行った施策や，交通事故の多い街が行った施策などをクイズ形式で考えた。   選挙制度の歴史や仕組み， 弘前市の投票率の現状に ついての授業を行う 笹　淳平　氏 

授業の様子	＝＝政治家追い出しゲーム＝＝ まず，以下５つの政策分野が提示され，日本の厳しい財政状況の中，今後お金をかけるべきだと思う政策を１つ選びその理由をグループ内で発表し合う。次に追い出しタイムとして，グループ内の議論を踏まえて「A.１番お金をかけるべき政策分野，B.お金をかけるべきではない政策分野」を選択し，グループ内で一斉に見せ合う。グループ内で最も多く「B.お金をかけるべきではない政策分野」に選択された政策を「A.１番お金をかけるべき政策分野」に選択してしまった人は脱落する。  ５つの政策分野 ① 産業政策 ② 社会保障政策 ③ 子育て・教育政策 ④ まちづくり政策 ⑤ 外交・安全保障政策 どの政策にも人が関わっていて、まずは人材育成が重要であるなどの意見から子育て・教育政策をＡに選ぶ人が多かった。 ＝＝アニメ教材視聴の様子＝＝ ポリポリ村で橋を作って住民の移動手段を増やしたいがお金がかかるため，毎年行っている祭りを今年は行うことができない。そこで村長が橋を作る代表者と祭りを行う代表者がそれぞれ演説をし，住民の投票で決めようと提案する。  ２つの結末を用意し，実際に小学校では生徒にどちらを優先させるか投票してもらい，票数の多かった結末を見せてい ＝＝グループワーク＝＝  県議員・知事選，参議院選に行ったか，なぜ若者は投票に行かないのかについてグループで討論した。

授業の様子

若者が投票に行かない理由として、興味・関心がないから,どうせ自分一人が投票したところで…という諦めなどが多く挙げられた。





「どうすれば若者は投票に行くようになるか」について討論し，若者の投票率向上のための重点施策を各グループ２つ考える。

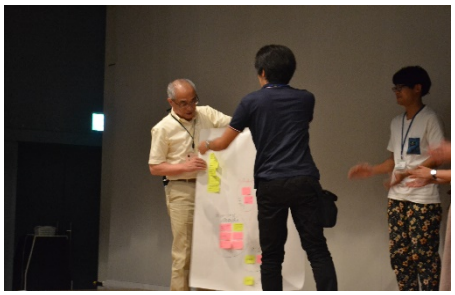
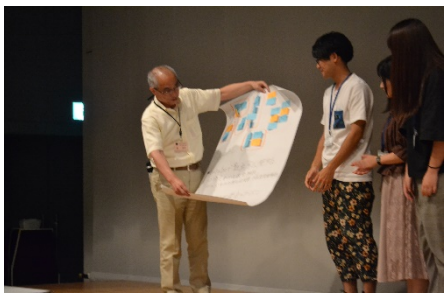
既存のグループから各１名が集まる形で新たなグループを形成し,各班の重点施策を他の班の人と意見交換した。





各班から出された重点施策

① YouTube 動画を公開する
② 選挙に行くと加盟店のクーポンがもらえる
③ コンビニで投票できるようにする
④ NHK の朝ドラを活用する
⑤ スマホに候補者情報,投票リンク配信
⑥ 無記名の枠を用紙に追加する
⑦ インターネット投票システム
⑧ 天皇による投票促進活動
⑨ハガキを投票用紙として利用
⑩大学で選挙を必要単位にする
⑪投票したらお買物券がもらえる
⑫公約などのわかりやすい比較表配布
⑬学校や会社でアンケート形式で投票
⑭投票率上位の地域に有名人を呼ぶ
⑮選挙管理委員会による選挙アプリ

授業の様子	＝＝模擬選挙，投票と結果発表＝＝  どの施策が良いか，模擬選挙で投票する様子 投票結果を読み上げる蒔田先生とそれを書き加えていくインターン生たち   投票の結果，①YouTube 動画を公開する，⑦インターネット投票システムの２つの施策が選ばれた。    学生が考えた施策が選挙管理委員会の笹氏に提出された。

まとめ	アイスブレイクや政治家追い出しゲーム，アイディア出し，アニメ教材の視聴など午前中は各班コミュニケーションを深めながら選挙について楽しく学んでいった。 蒔田先生，ゲスト講師の笹氏それぞれから選挙制度の歴史や全国，青森県の投票率の状況，世界での投票率向上のための施策などを学んだ後，午後の講義では最近行われた選挙に参加したか，どうして参加しなかったのかなどといったことについてのグループワークを中心に行った。各班，選挙に行かなかった人の方が多く，理由としては興味がない，政治への諦め，選挙情報が少なくよくわからないなどといった意見が挙げられていた。 若者の投票率向上にむけた施策を考え発表する場面では，各班の施策に他の班からの質問が飛び交い，その質問に真剣に答える様子を見て，３日間で最も熱い討論が行われたように感じられた。 本日の講義は自分の意見を他人に伝える場面が多く，説得力を身に付けるにはどうしたら良いのかということを学生たちは深く考えさせられた１日となった。「若者の政治参加」という学生にとって身近な問題をYouTube やインターネットといった若者らしい今ならではの目線から考え，他人に伝える力，他の班の意見を理解しようとする力，様々な情報から自分で判断する力を身に付けることができる良い機会であった。

文責：石沢　颯希（インターン生）

（３）　８月２２日（木）

テーマ	持続可能な街づくり
概要	この講義ではSDGsの視点を生かした街づくりについて考える。そもそもSDGsとは何のことか，どのような内容なのか，それがどのように街づくりに生かされるのかについて理解をしたうえで，弘前市の総合計画をSDGsの視点から検討し，あるべき弘前市の姿についてグループでの話し合いを通じて考える。
担当教員	東北女子大学　家政学部　　准教授　小野　昇平
自治体講師	弘前市企画部企画課　　主　査　猪股　　豪　氏 弘前市企画部企画課　　主　事　齋藤　佳太　氏
協力教員等	弘前大学　人文社会科学部　教　授　森　　樹男 弘前学院大学　看護学部　　講　師　齊藤　史恵

授業の流れ	【１コマ目】９時３０分～１１時００分 ・導入（自己紹介） ・講義①－SDGs について知ろう。SDGs の成り立ち。17 のゴール。 ・講義②－SDGs と地方創生について。 ・講義③－弘前市について知ろう：弘前市の特徴と総合計画の概要 弘前市企画部企画課　主事　齋藤　佳太　氏 （弘前市総合計画～みんなで創り　みんなをつなぐ　あずましいりんご色のまち～　～概要版～）
	【２コマ目】１１時１０分～１２時４０分 ・アイスブレイク 《SDGs と地域の課題を照らし合わせてみよう》 ・個人ワーク①－SDGs の 17 のゴールについて，それを総合計画の LP に割り当てる。 ・グループワーク① ・グループ発表
	【３コマ目】１３時３０分～１５時１５分 ・グループ発表に対するコメント 弘前市企画部企画課　主査　猪股　豪　氏 《SDGs をローカライズしてみよう》 ・個人ワーク②－各グループに割り当てられた SDGs のゴール中のターゲットをローカライズする。 ・グループワーク②－個人ワークで出た意見を集約し，模造紙にまとめる。
	【４コマ目】１５時２５分～１６時４０分 ・グループワーク②－3 コマから継続 《グループでの作業を相互チェックしよう》 ・個人ワーク③－各グループでローカライズした SDGs のターゲットを各自で確認し，修正すべき点や疑問点を付箋に書いてそれぞれの発表用模造紙に貼り付ける。
授業の流れ	【５コマ目】１６時５０分～１８時２０分 《「持続可能な街」のあり方（持続可能な街づくりの条件）を考えよう》 ・グループワーク④－回収した模造紙に貼ってある他の人たちからのコメントを見ながら，自分たちの担当したゴール／ターゲットの視点から考える「持続可能な街」のあり方（持続可能な街づくりの条件）を話し合ってまとめる。 ・グループ発表 ・教員からのコメント ・3 日間のまとめ ・レポートについての確認

授業の様子	＝＝SDGs についての講義の様子＝＝ 《講義の目的》 地域住民の一人として，自分の住む町をよくするために何が出来るかを考えられる人になる。  SDGs について講義をする小野先生 《講義内容》 弘前市の総合計画のうち，特に重点政策である 5 つのリーディングプロジェクト（LP）について  齋藤　佳太　氏による講義 ＝＝SDGs と地域の課題を照らし合わせてみよう＝＝  SDGs の 17 のゴールについて、総合計画の LP にあてはめる。  グループでまとめたものをボードに貼り,発表していく。



学生の発表に対するコメントをする
猪股　豪　氏

＝＝SDGs をローカライズしてみよう＝＝

「ローカライズ」とは･･･そのままでは地域の課題解決と結び付けづらい SDGs のターゲット，ゴール，指標を，地方自治体の政策に活用するにあたりローカルな場面に適用できるよう翻訳すること。

授業の様子



打ち解けた様子で全員が知恵を出し合い，活発に話し合いを進めていた。

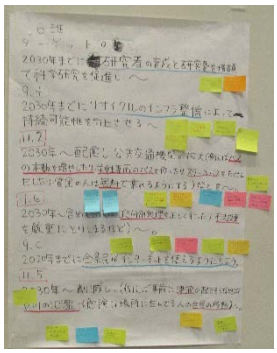
グループでまとめたことを模造紙に書き出していく。





他のグループで挙げられた政策について，修正すべき点や疑問点を付箋に書いて貼っていく作業。

授業の様子

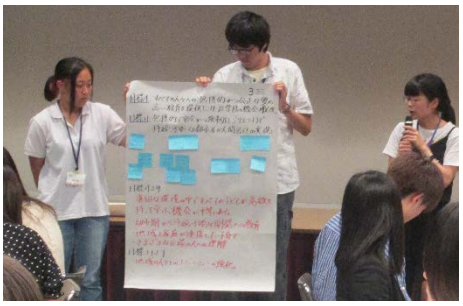


各グループの模造紙には，「具体的でわかりやすかった」「コスト面での問題はないのか」などの意見が出された。

＝＝「持続可能な街」のあり方を考えよう＝＝

貼られた付箋を見て,自分たちの政策を修正していく。





最終発表は他者の意見を取り入れながら，限られた時間でしっかりと改善されていた。指摘された疑問点に回答するグループも多く見られた。

＝＝まとめ＝＝

・持続可能な街づくりは一人では達成できない。
・持続可能な街づくりは誰かに達成してもらうものでもない。
・持続可能な街づくりはみんなで成し遂げていくもの。



SDGs はみんなの共通言語となる

まとめ	3 日間の中で最もグループワークが活発に行われた印象を受けた。立ち上がって意見の共有をしたり，他のグループとも交流しながら柔軟かつ積極的な話し合いがされていた。SDGs というテーマは難しいように思えたが，それを感じさせない程多くの意見が各グループで出された。 SDGs の 17 のゴールについて総合計画の LP にあてはめるワークの発表では，他のグループの発表内容をメモし自分たちの発表と比較している学生が多く見られた。また，SDGs をローカライズする際には，他のグループがどう考えたのかをインプットするだけではなく，その意見に対して自分はどう考え，どういった点に疑問を抱いたのかをアウトプットすることが出来ていた。ローカライズすることで，学生は SDGs を身近でわかりやすいものに変換し，解決策を考えていくことが出来たようだ。また，難しい課題に対しても一人一人が知恵やアイデアを出し合い，解決策について具体的な数値目標もまじえて考えられていた。 SDGs の視点から地域課題を見直したことで，学生は弘前市がどのような課題を抱えているのかということを知るきっかけになったようだ。この授業を通して，地域課題が自分が考えているよりももっと身近なものであると気付けたのではないだろうか。

文責：大友　柚紀（インターン生）

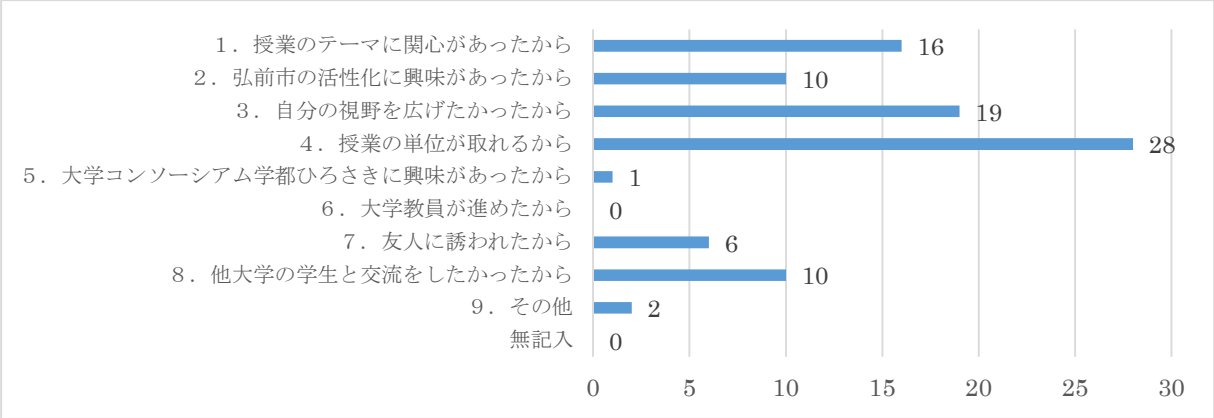
５．単位認定者

○弘前学院大学：　８名
○東北女子大学：　５名
○弘前大学　　：３０名

６．授業アンケート

○アンケート実施日	○回答者数／出席者数	○回答率
８月２２日（木）	４２名／４５名	９３．３３％

○なぜ授業に参加しましたか。（複数回答可）



「９．その他」と回答した人の意見

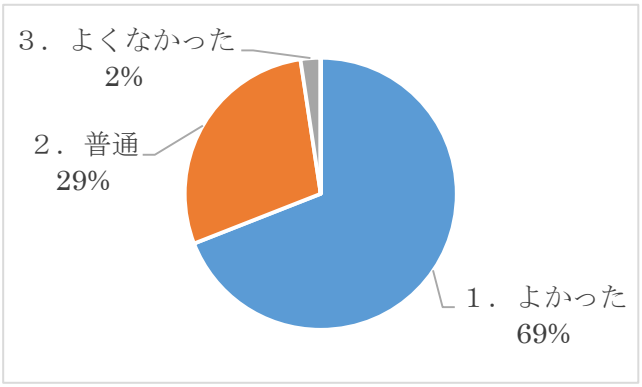
・来年に受講したくなかった。

・どういうものかわからず気づいたら取っていた。

【今年度の授業について】

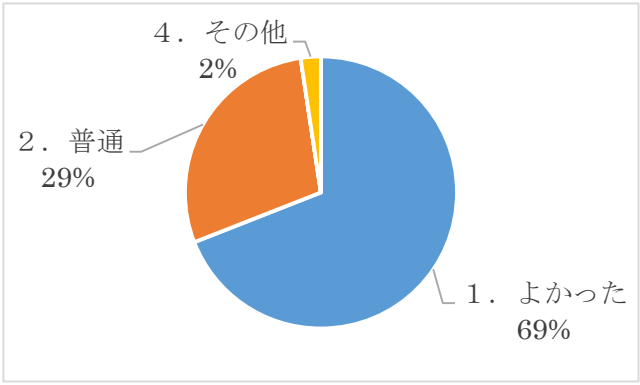
○１日目テーマ「青森の地域生活課題」について

	回答数
１．よかった	２９
２．普通	１２
３．よくなかった	１
４．その他	０
無記入	１
計	４２



○２日目テーマ：「若者の政治参加」について

	回答数
１．よかった	２９
２．普通	１２
３．よくなかった	０
４．その他	１
無記入	０
計	４２

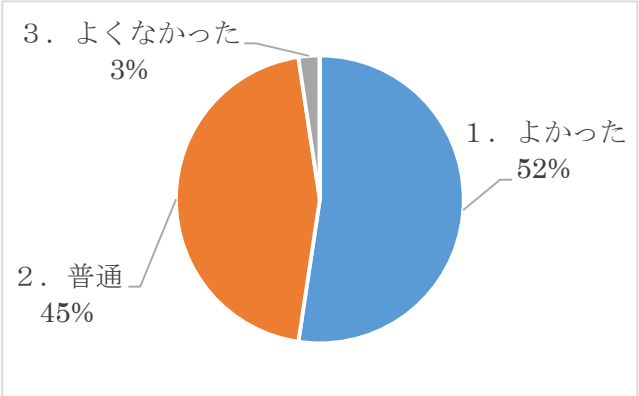


「４．その他」と回答した人の意見

・選挙に行ったか行かないかはプライバシーな部分だし，ちょっとしゃべりたくなかった。理由をしゃべってもマウントとってくる人がいるのは目に見えてるし，少し嫌だった。

○３日目テーマ「持続可能な街づくり」について

	回答数
１．よかった	２２
２．普通	１９
３．よくなかった	１
４．その他	０
無記入	０
計	４２

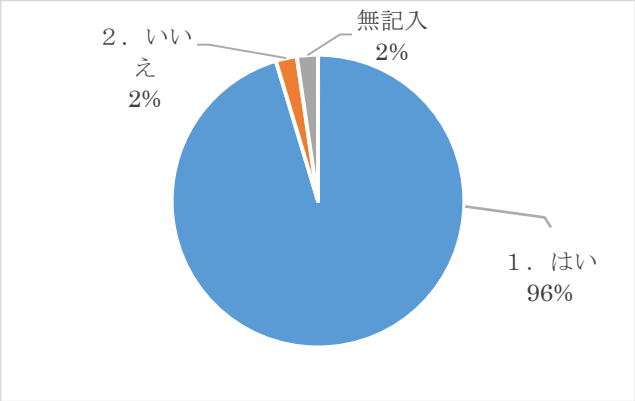


その他の意見

・全体的にわかりにくかった印象を受けた。

○授業を通して地域の課題に興味を持ちましたか。

	回答数
１．はい	４１
２．いいえ	１
無記入	０
計	４２



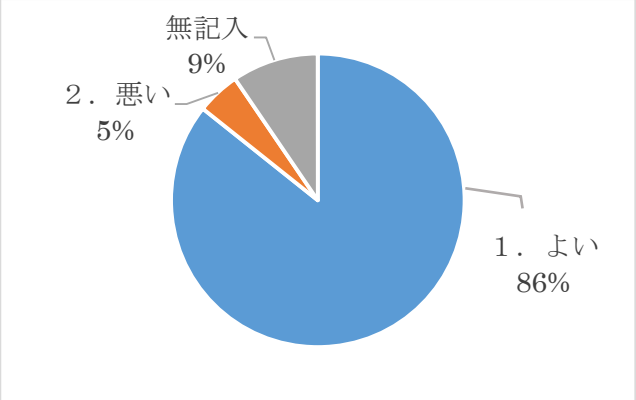
○あなたが考える地域の課題は何ですか

・障害理解の不十分さゆえの偏見を受け，生きづらいと感じる人がいること，その事実を知らない人がいること。
・司法過疎，過疎地域の医療問題。
・人口減少→地方の力が減少→団体低下
・地域を身近に感じて興味を持つ必要があると感じた。
・投票率の低さ，政治への関心の低さ（同様の意見他４件）
・授業でもやった通り，子育て問題や，高齢者問題。
・弘前や青森県全体が果たして，高齢になった時に暮らしやすいまちであると言い切れないから，バリアフリーなど考えればよい。短命県ならば，短命県なりに高齢者にやさしいまちづくりという面でアピールすべきではないかと思った。
・コミュニティを作ること。人との繋がりなしに生きてくことは難しいと思う。作り方，種類，規模は様々であれ，人との繋がりは大切だと思う。
・最低賃金，学生のアルバイト，学業，バイトで勉強できないとか。
・社会的弱者への対応。
・少子高齢社会のため，人材不足や医療費の問題。
・若者の人口流出。（同様の意見他４件）

・様々な立場（高齢者，障害者）への理解や支援が足りない。
・県民のアイデンティティや性格，考え方的に健康に対して雑に考えている人が多いと思う。遊ぶところが少なく，県内就職しても休みがつまらなくなってしまうと考えているので，県外就職したいと考えてしまう。若い人が少なくなって，高齢者向けの事業しか展開されなくなり，“高齢者が住みやすい街”のイメージがつきまとう場所になってしまいそう。
・産業・福祉の充実。
・文化の継承。
・少子高齢化。（同様の意見他１件）
・過疎化などによる問題。（同様の意見他１件）
・弘前の道路状況が身体不自由者にとって非常によくないこと。
・経済を上手く回すシステムが少ない。せっかくの学生の街なのだから学生を主体として経済を回すことが可能なのではないか？
・インフラの整備
・交通手段の不便さ
・弘前市の活性化
・まちづくりの仕方が若者を地域から離れさせている。
・自分が暮らしている地域に魅力を感じない若者をどのようにして定住させるように仕向けるかが課題。
・高齢者の介護。

○会場について（ヒロロ４階）

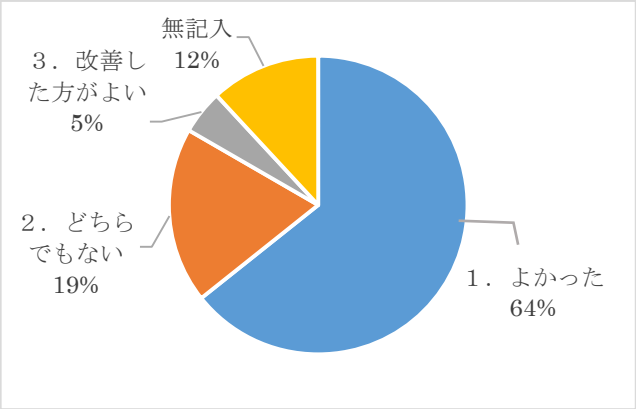
	回答数
１．よい	３６
２．悪い	2
無記入	4
計	４２



その他意見など
・もっと空調の調整がきくところが良い。

○グループディスカッション・発表の時間割り振り等について

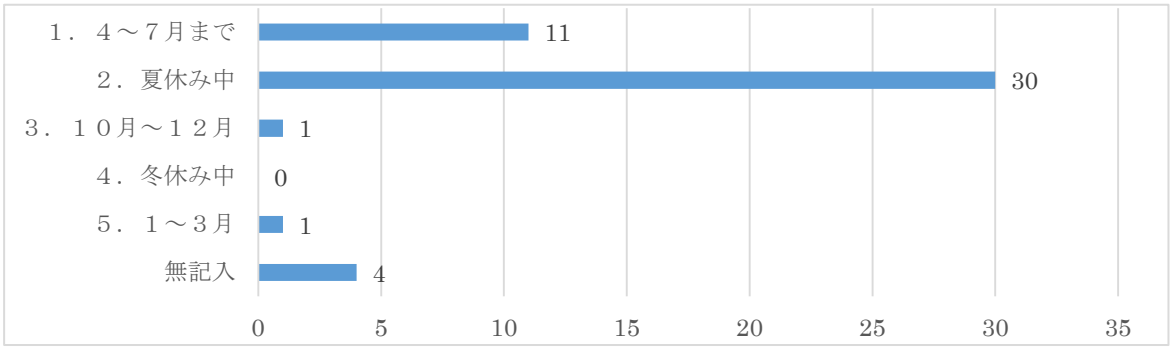
	回答数
１．よかった	２７
２．どちらでもない	8
３．改善した方がよい	2
無記入	5
計	４２



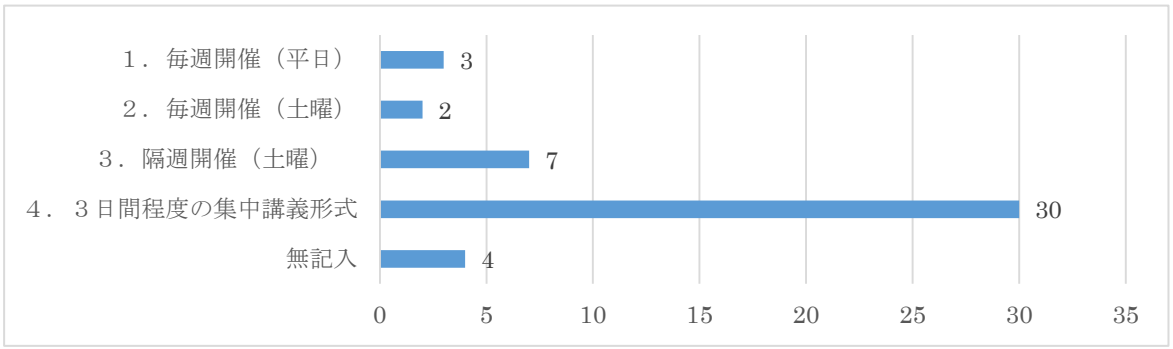
その他意見など
・時間を決めたらそこで止めるべきだと思う。
・多すぎ。

【来年度の授業について】

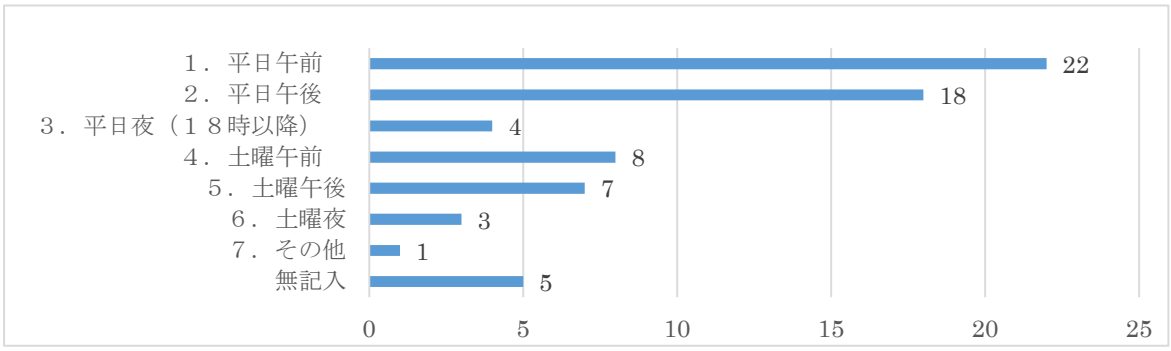
○開催時期について，あなたが望ましいと思う時期について答えてください（複数回答可）



○開催形式について，あなたが望ましいと思う開催形式について答えてください（複数回答可）



○開催時間について，あなたが望ましいと思う時間について答えてください（複数回答可）

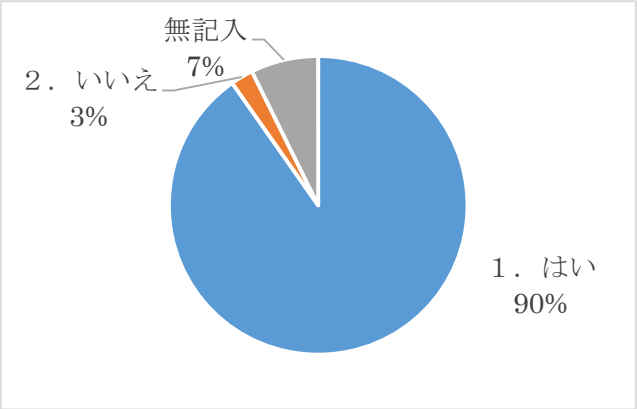


「７．その他」と回答した人の意見

・集中講義ならいつでも

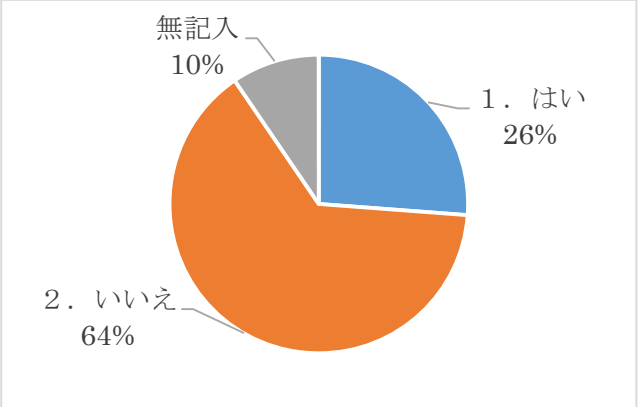
○同様の内容で開講された場合，同級生や後輩に勧めますか。

	回答数
１．はい	３７
２．いいえ	１
無記入	４
計	４２



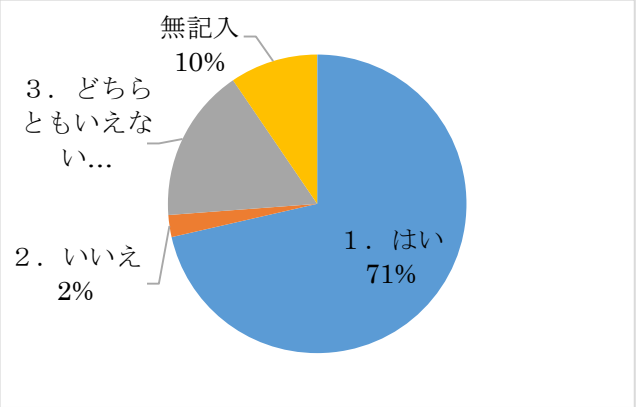
○これまでに他大学の学生と，授業や課外活動などを通じて，交流を図ったことはありますか。

	回答数
１．はい	１１
２．いいえ	２７
無記入	４
計	４２



○今後も他大学の学生と交流を図っていきたいと思いますか。

	回答数
１．はい	３０
２．いいえ	１
３．どちらともいえない	７
無記入	４
計	４２



◯授業の感想

・受講生間で授業に取り組む際の熱量や意識の程度に差があり，活発に話し合いをすることは難しかったが，個人的に興味があった地域の問題について先生の講義から学んだり考えたりできた点は良かった。せっかく他大学・他学部の学生が集まっているのだから，それぞれが学んでいる分野からの視点での話し合いを促していただけるとより充実すると思う。
・他学部・他大学と関わる機会があまりないので，とても良い機会で良かった。発表の時に，事務局の人が雑談しているのが気になる。
・3 日目，時間通りに終わってほしかったです。ディスカッションは良い社会経験になりました。視野が広がったと思います。
・3 日目お疲れ様でした。3 日間連続で疲れましたが，とても興味深い内容で面白かったです。
・3 日目の東北女子大の先生が，午前中 1 コマ目の核の 3 原則などの話をされていましたが，例であっても，冗談であってもあまり言うべきではないのではないかと思いました。
・いつも教育学部では学べないことを，グループワークを通して学べたので楽しかったです。
・楽しかったです。
・自分の将来について考えるきっかけになりました。ありがとうございました。
・自分は理工学部なので，あまり政治的なものもよく分からず，地元が弘前でなかったので，今回の集中講義は不安でしたが，実際参加してみて，自分が絶対関わっていることや経験していることに絡めて授業が進んだので良かったです。
・グループディスカッションを活発に行うことが出来て良かったと思う。他大学の人と関わる機会が今までなかったので，良い経験になった。今回習ったことをいかして地域に積極的に関わっていきたいと思う。
・政治参加のように，今まで関心はあったけど，どこから手をつけていいのか分からないテーマについて，知識を得るだけでなく，私たちができることについても同世代の学生と考えられました。今回得たものを今後の学習や別のテーマを考えるときにも役立てていきたいと思います。
・他大学や様々な兼ね合いがあると思いますが，ガイダンスが遅くてバイトなどの予定を入れていまい，大変でした。（こちらにも責任はありますが）また，授業進行がもう少し時間にゆとりがあると，気持ちにもゆとりがあると感じました。せめて 20 分には余裕を持って終わって下さい。
・グループディスカッションがとても良い経験になりました。お菓子をくださったりと様々な面でのサポートが嬉しかったです。ありがとうございました。
・ただ話を聞いているより，グループで討論した方が時間がスムーズに進んだし，コミュニケーションをどうとるかについても学ぶことができた。自分で考えることがいかに記憶に残るかを実感できた。
・他大学の学生と交流する機会がなかったので良い経験になった。
・改めて地域やその問題について考える良い機会になった。
・初対面の人とグループディスカッションすることに不安を感じていたけれど恐れることはない。すぐにうちとけられた。とてもたのしかったし，自信にもなった。
・1 日目のテーマが地域生活課題ということで個人的にあまり興味は無かったのだが，講義自体は大変興味深く市の方のお話も大変面白かった。
・ただ座学で話を聞くだけよりも，他の人の意見を実際に聞けたりしたのが良かった。班での活動だと，自分以外の新しい視点で見れた。
・ヒロロの駐車場代 3 日間 2,100 円自腹はあまりに大変なので対策があると嬉しいです。

・夏休み始まってすぐなら，学校の時間割の配分を覚えていると思うので，そしたら来ない人も減ると思うし，1つの班での人数が余ったりしないと思います。
・他の学校や学年の人との交流は初め緊張したが結果良い経験になりました。自分とは違う考えや違う角度からの意見はとても興味深いものでした。先輩方には助けられてばかりだったが楽しかったです。
・他の大学の先輩方と勉強して，色々なことを学ぶことができました。地域の問題に触れる機会に参加できてよかったです。難しかったけど，考えるべきことだと思える内容でした。

【アンケート集計】文責：石沢　颯希，大友　柚紀（インターン生）

７．授業の成果

今年度は，昨年度からの継続テーマ（青森の地域生活課題及び若者の政治参加）及び新規テーマ（持続可能な街づくり）を開講し，継続テーマも前年度の授業内容をブラッシュアップし，３日間とも趣向を凝らしたプログラムとなった。

受講した学生は，普段の授業では学べないことを学べたことや，他大学も交えたグループディスカッションを活発に行い討論することにより，ただ話しを聞いているよりもコミュニケーションがとれ交流を深める良い経験となったようだ。また，「自分で考えることによりいかに記憶に残るかを実感できた。」「今まで政治参加などのテーマについて興味はありつつも，どこから手をつけて良いのかわからなかったが，今回授業を通して触れることができ，今後に役立てていきたいと思う。」という意見もあり，学生の自発性や自己啓発を促す，より質の高い授業を提供することができた。受講する学生は毎年変化するが，今年度は，昨年度の内容からさらに深く授業を展開することができたことで，来年に繋がる良い内容の集中講義となった。

８．次年度開講に向けての課題

講義当日は，欠席者もいたため，各班のグループ人数に差が出てしまったこともあった。討論を進める上で問題はないが，自己紹介などの際，所要時間に差が出た。次年度は，授業が始まる前に出席具合などを把握し，グループ編成を見直せるようにすること，また，円滑な授業が行えるよう配慮出来るように工夫することが課題に挙げられる。

さらに，学生の中には，プライベートにあまり踏み込まれたくないデリケートな学生もいることや，討論が白熱しすぎて相手を傷つけてしまう可能性もあることも視野に入れて，授業内容を検討していく必要性もある。

インターンシップ受入

１．概要

○目的

具体的な事業運営を通じて，学生の企画立案力やマネージメント力を養うことに加え，自治体と大学コンソーシアムが連携することの意義を模索し，地域課題の把握，地域志向力の向上を目指す。

○業務内容

大学コンソーシアム学都ひろさきが主催する，集中講義「共通授業」の運営業務

・事前準備

・当日運営

・授業終了後処理

○受入人数

２名

○期間及び時間

令和元年７月２日（火）～８月２８日（水）　合計７５時間程度

２．業務内容

（１） 事前準備

ガイダンス，名刺作成，挨拶まわり，共通授業会場下見，関係者による全体打合せ参加，授業の準備等



←挨拶まわりの様子



↑

ヒロロの方との事前打ち合わせ



↑

これからお世話になる

弘前大学社会連携課の方々

会場下見の様子→



前日の会場設営，準備の様子　→





（２） 当日運営

受付，授業の補助等













（３） 授業終了後

報告書の作成，授業アンケートの集計作業，インターンシップ終了報告







インターンシップ終了報告の様子

今回インターンシップに
参加した学生と担当の酒井
さんと花田さんと小野さん

○弘前大学人文社会科学部３年　石沢　颯希

今回，約２ヶ月もの間インターンシップ生として受け入れてくださった大学コンソーシアム学都ひろさき様には本当に感謝しています。このインターンシップで，私たちが今まで当たり前のように受けていた講義の裏には，様々な方々の協力があって成り立つものであると実感すること

ができました。

あっという間であった 2 ヶ月間でしたが，その中で最も苦労した作業が，パソコンを使用した作業です。元々パソコン業務は苦手で，Word を使用した報告書作成や，Excel を使用したアンケートの集計作業やグラフ作成でパソコンを効率的に使用することができず，時間がかかってしまいました。大学コンソーシアムの方々の仕事を観察していても，多くの方が Word や Excel を長時間使用しながら仕事をされていて，働く上でのパソコン作業の重要さを実感しました。苦手ながらも，インターン生と協力し合い，弘前大学社会連携部の皆様にも何度も質問をしながら，なんとかこの報告書を完成させることができました。今回の経験を活かして，これからの学校生活でパソコン能力を向上させるように努めたいと思います。

たった 3 日間の集中講義でも，先生方，市役所の方々，選挙管理委員会の方，福祉部の方々，ヒロロの方，そしてコンソーシアムの方など多くの人が関わっていて，様々な方とお話しする機会もあり，多くの方と出会い，交流を深めることができたことは自身にとって良い経験となったと思います。

講義当日に不備のないようにしっかり準備してきたつもりではありましたが，講義当日では予想よりも欠席者が多く班の人数に偏りが出てしまったり，椅子が足りなかったりなどいくつかのハプニングがありましたが，事務局の方々と一緒に積極的に対応することができたと思います。しかし，講義中のマイクの受け渡しや，グループワークが上手くいっていない班への気遣いなどを積極的に行うことができず，事務局の方が動いてから気付く形になってしまったのでもっと視野を広げて行動するべきだったと反省しています。

インターンシップで１つの講義を行うにあったって，裏ではコンソーシアムの方が大量の資料を準備し，外部の方と先生，学生を繋ぐお仕事をしているということがわかり，これから学校の講義やイベントなどがあったとき，裏では誰かが努力していることを感じながら参加しようと思いました。インターンシップの担当をしてくださった弘前大学社会連携部の皆様は様々なことを優しく教えてくださり，最初は緊張していたものの，徐々にインターンシップが楽しくなっていきました。本当に感謝しています。ありがとうございました。

今回のインターンシップで学んだことや反省を今後に活かし，これからも努力していきたいと思います。

〇弘前大学人文社会科学部 3 年　大友　柚紀

コンソーシアム学都ひろさきでのインターンシップを通して，貴重な体験させて頂いたと共に，たくさんの学びを得ることができました。普段は学生として授業を受けている自分が，今回は授業の運営にまわり普段とは違った視点から物事を考えたことは，自分の視野を広げるとても良い経験になりました。

今回のインターンシップではパソコンでの事務作業が多くあったのですが，Word や Excel の操作に不慣れでなかなか思うように進められず苦労しました。普段レポート作成でしか Word を使わず他の操作をよく知らなかったのですが，様々な操作を行う社会人としてのツールの使い方を知ることができ，とても勉強になりました。社会人にはやはりパソコン操作は必要不可欠であると感じたため，もっと使いこなせるよう学生のうちに勉強しなければならないと感じました。

今回授業の運営に関わらせて頂きましたが，共通授業が自分の想像していた以上にたくさんの時間と手間をかけて準備されていることに驚きました。スケジュールの確認や備品等のリストアップを念入りにしておくことで，授業当日に次の場面を予測しながらスムーズに動くことができました。しかし３日間長時間の勤務ということで疲れから集中力が散漫になり，対応が遅れたりやるべきことに気付かなかったりしたことがあったため，そこは反省点でした。自分の体力の無さを痛感すると共に，常にしっかりした対応が求められるのが社会人であり，自分に足りない所であると感じました。授業自体では，初日には緊張からなかなか意見を出せなかった学生達が，グループワーク等を通して徐々に打ち解け，最終日には話し合いや討論が活発に行われていく様子を間近で感じ，嬉しく思いました。アイスブレイクからグループ発表までの一連の流れを見ていると，学生達は自分で考えることで内容をしっかりと頭に入れ課題と向き合うことができており，一つ一つの作業の狙いやその役割に気付くことができました。

インターンシップに参加した約２ヶ月もの間，事務局の方々には大変お世話になりました。お忙しい中でも丁寧に指導して頂き，初めは社会人の中に入ることに気が引けていたインターンシップも，徐々に緊張がほぐれ最終日まで頑張ることができました。作業のたびに私達に配慮して下さったおかげで，分からないことを分からないままにせずすぐに解決することができたため，事務局の方々には本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

３．インターンシップ受入の成果

今年度は，昨年度から２名少ない状態でインターンシップを受け入れた。社会人の中に踏み込むことは，学生時代には緊張する場面でもあるため，始めは馴染めるかどうか事務局側としても心配はあったが，学生自身の向上心や成長が著しく，自然と良い関係を築くことが出来た。

特に共通授業に主催者側として参加することにより，自分達が普段受けている側の授業の裏では，様々な人の協力があること，準備にも時間がかかることなど，貴重な社会体験をすることが出来たと，インターンシップ生自身も感じることが出来ていた。

学生地域活動支援事業

１．学生地域活動支援事業とは

学生が企画立案したまちづくり，地域づくりの活動に係る経費の一部を支援する公募型の事業である。地域課題の解決や地域の活性化につながる活動を支援し，学生による魅力あるまちづくりの推進を図ること及び地域活動を通じて，学生が地域の一員としての社会的力量を形成することを目的に実施する。

一定の申請条件を満たせば応募でき，応募された活動は本コンソーシアムが実施する審査を経て助成を決定する。

２．各採択団体，事業及び実績報告

（１） アカペラサークルＶ．Ｅ．Ｌ（弘前大学）

１　事業名称
弘前大学アカペラサークル V.E.L Winter Live 事業
２　事業の遂行の概要
１　イベント：第５回 Winter Live 開催場所：弘前市民文化交流館ホール（ヒロロ４階） 日程：令和元年１２月２７日（金）※リハーサル 令和元年１２月２８日（土）※当日 詳細：オーディションで選ばれた上位９グループが演奏を披露する。オーディションはサークル員の投票によって行われる。選考基準として演奏の質，パフォーマンス力，音楽のジャンルなどが考慮される。また，ライブの導入と最後にはサークル員全員で歌う全体曲を披露する。会場内を囲んで演奏をすることでお客さんにも声だけで奏でられるというアカペラを間近に触れてもらい，会場全体が一体となるような企画を実施した。 ２　イベント：第５回 Winter Live プレイベント 開催場所：イトーヨーカドー弘前店 地下オートスロープ（地下１階） 弘前中三 スパイラル（１階） 日程：イトーヨーカドー　令和元年１２月１５日（日） 中三　令和元年１２月２２日（日） 詳細：イトーヨーカドーでの演奏と中三での演奏は昨年度も行ったが，今年度は規模を大きくし，出演バンドもこだわるなど，より質を重視したライブをプレイベントとして企画した。商業施設でライブを行うことで地域経済の発展に貢献すること，Winter Live を知ってもらい集客につなげることを目標としている。

３：弘前市内の学校訪問

開催場所：弘前市立第三中学校，弘前市豊田児童センター，弘前市みどり保育園

日程：第三中学校　令和元年１１月１日（金）

豊田児童センター　令和元年１２月１４日（土）

みどり保育園　令和元年１２月１９日（木）

詳細：昨年に引き続き，第三中学校では合唱コンクールでアカペラの演奏を行った。令和元年度は，新たに豊田児童センターとみどり保育園内のイベントにも参加させて頂き，アカペラを通じて子どもたちと交流する機会を設けられた。若い世代にアカペラに興味を持ってもらうこと，多世代交流を図るとともに，Winter Live を知ってもらい集客につなげられることを目標とし実施に至った。

４：弘前市内の病院訪問

開催場所：国立病院機構弘前病院

日程：令和元年９月１２日（木）

詳細：弘前市内の病院の入院患者や従業員を対象に演奏する。当事業は Winter Live の宣伝活動の一環ではあるが，アカペラの魅力，楽しさを伝えることを第一とし，世代間交流を深めることを主な目的とする。年代に合わせた親しみやすい選曲で演奏を披露した。

３　事業の期間

令和元年７月１日（月）から令和元年１２月３１日（火）

４　事業の参加者

１　第５回 Winter Live：サークル員　６７名

来場者数　１８６名

２　第５回 Winter Live プレイベント：サークル員　５６名

来場者数　約８０名

３　学校訪問：サークル員　１７名

鑑賞者数　約５９０名

４　弘前市内の病院訪問：サークル員　２４名

鑑賞者数　約７０名

５　事業の遂行による成果

１　第５回 Winter Live

年末開催で帰省している大学生が多いということもあり，来場者人数は昨年度より減少して１８６名であったが，途中退室が例年より少ない傾向にあり，ライブを最初から最後まで楽し

んでくださる方が以前よりも増えた。この Winter Live に関するアンケートを取り，１８１名からの回答を頂いた。「何時頃に入場したか」という質問にて，「開演前」と回答した人数は１３１名であった。Winter Live を通して，多くの方にアカペラの良さ，学生活動，音楽活動の活発さを伝えられることができた。また，アンケートより回答者の約８割が会場施設であるヒロロを「利用した」または「これから利用する予定だ」を選択している。さらに約 4 割の方が市外，県外から来場しており，公共交通機関の利用も増えていると思われる。「このライブをどこで知ったか」という項目では，「サークル員や知人から」，「ポスター，チラシから」，「SNS から」といった回答が多く，事前情報が来場の主なきっかけとなっており，ライブを目的にヒロロに足を運ぶ人が多く見られたため，イベントを通して弘前市の商業施設や公共交通機関の利用者の増加につなげられた。観客の年齢層を見ると，２０代が７８名であり特に人数の集中が見られたが，１０代未満から８０代まで幅広い世代の方に足を運んで頂けたことがわかった。これは，地域の多くの人にアカペラに触れてもらいたい，多世代交流を重視したい，というイベントの目的に対して良い結果が得られたと感じている。また，「どこから来たか」という項目においては，弘前市を中心に青森県内の市町村から千葉まで，様々な地域からお越し頂いていることがわかった。この結果より，当イベントを開催したことで，多くの方に「弘前市は音楽活動の活発な町」，という印象をつけることができたのではないかと感じている。

昨年度に引き続き，アンケートにこれまでの Winter Live を観に来たことはあるか，という項目を入れた。昨年度は７１％の方が初めて観たと回答していたが，今年度は６１％に減少しており，V.E.L の活動が認知されてきているのだとわかった。近年の Winter Live の宣伝において，ポスターを中心に Twitter，Instagram など SNS に力を入れているため，弘前市におけるアカペラ活動の周知の拡大，常連客の誘致に繋がったと考えられる。これまでのストーリー調のライブ演出が大好評であったため，今年度もストーリー仕立てのライブ演出を行った。今年度はアカペラライブをメインに行うことを考えていたため，昨年度より軽易な演出を施したが，無記入を除いて９割以上の方が「とても楽しめた・楽しめた」に回答している。アンケートの最後に設けた自由記入欄には，各演奏グループへの感想の他に，「若いパワーがあふれていてよかった」，「年一回ではなくて Summer Live もやってほしい」，「できれば参加してみたいし，歌ってみたい！」などのコメントがあり，満足して頂けたと共にアカペラに興味を持つ方が多く見られた。また，「来年も見に来ます」という声が多くあり，多くの方と今後も関係を築いていけることに嬉しさを感じていると同時に，この関係を大事にしていきたいと強く思った。

２　第５回 Winter Live プレイベント

イトーヨーカドー弘前店と弘前中三にてアカペラコンサートを開催した。ポスターを利用しコンサートの宣伝を行ったことで合計の来場者数が昨年よりも多く，たくさんの方にアカペラを知ってもらい，楽しんでもらうことができた。出演グループや演奏曲が学校，病院訪問よりも多いため，実際のライブに近似しており，お客さんからは賞賛の言葉を頂いた。昨年度まで行っていた子供向けイベントは会場の都合で開催することができなかったが，商業施設の一角をお借りしたことにより，多くの世代の方にアカペラを知ってもらうこと，アカペラを通して地域の方々と交流することができる良い機会となった。

３　弘前市内の学校訪問

昨年に引き続き，第三中学校の合唱コンクールにてアカペラの演奏を行った。合唱とアカペラは似ていると思われるが，実際に演奏しアカペラを聞いてもらうことで，若者が合唱とは異なる新たな音楽形態に触れる良い機会となったと思う。選曲も合唱に使われるような曲にしたことで，生徒たちにとっていい刺激を受けたような雰囲気が見られた。豊田児童センターではクリスマス会のゲストとして参加した。小さな子供たちにアカペラの説明をした後にアカペラでクリスマスソングを披露すると，とても楽しんでいる様子だった。また，交流の一環としてビンゴ大会を行うと，とても盛り上がっていた。みどり保育園ではイベントを企画してもらい，園児向けの曲やクリスマスソングを披露した。他にもアカペラでのイントロクイズや，子供の中で流行している「パプリカ」を演奏すると，園児たちは大興奮でアカペラを一緒に楽しんだ。

これらの学校訪問は若い世代へのアカペラの周知に繋がった。アカペラを利用してミニゲームを行ったことでアカペラの手軽さも伝わり，若い世代のこれからの音楽活動に良い刺激を与えられたと思う。

４　弘前市内の病院訪問

弘前病院に訪問し，各フロアで１グループずつ演奏をした。昭和の名曲や最近のＪポップ，ジブリの楽曲から，幅広い世代の方に楽しんでもらえるよう，誰もが一度は耳にしたことのある馴染みのある曲を選び演奏した。頂いた時間の中で患者の方とお話する機会を設けることができ，「すごく素敵だ」「とても楽しくてあっという間だった，もっと聞きたい」といった声を聞くことができた。アカペラ演奏を披露したことにより，入院患者さんの良い気分転換となることができたと思う。弘前病院への訪問は平成２９年度から続いており，今後も継続して実施できるように努めていきたい。

６　事業に対する補助金の交付の効果

項目５の第５回 Winter Live の内容と重複するが，補助金を利用してヒロロの会場を借りたことで，弘前市に経済効果が生まれている。Winter Live にてアンケートを実施したところ，回答者 181 名のうち，商業施設であるヒロロを「利用した」または「これから利用する予定だ」と回答したのは約 8 割にも上った。また，約 4 割の方が市外，県外から来場しており，公共交通機関の利用も増えていると思われる。加えて「このライブをどこで知ったか」という項目では，「サークル員や知人から」，「ポスター，チラシから」，「SNS から」といった回答が多く，事前情報が来場の主なきっかけとなっており，ライブを目的にヒロロに足を運ぶ人が多く見られたため，イベントを通して弘前市の商業施設や公共交通機関の利用者の増加につなげられた。

Winter Live 当日の集客のために開催したプレイベントや学校，病院訪問では，アカペラを通して多くの世代と交流をすることができ，アカペラの周知や音楽活動の活性化に貢献できたと思う。また，補助金を会場費に使用したことによって予算をポスターやチラシの印刷に活用することができ，集客へつなげることができた。アンケートでも，ポスターやチラシによって当イベントを知った方が多くおり，実際に効果に現れていることがわかった。

7　反省点・改善点

○Winter Live プレイベントにおいて，昨年とプレイベントの形態が変わったため，入念に準備ができなかった。特にアンケートを実施し，実際に経済効果が生まれたのか，当日の集客に繋がったのかを調査するべきだった。来年度はどのようなプレイベントを行うことになったとしても，やり残すことがないように細部にまで気を配っていきたい。また，イベントを行う際に会場の決定に難航していたため，事業開始時に行いたいイベント，会場を確認し，借りておくことが必要であると感じた。

○昨年同様，メディアでの宣伝が希薄になってしまった。今年度はテレビによる発信もする予定であったが，都合が合わず実現することができなかった。昨年度の反省を踏まえて計画をすることはできたが，メディアでの宣伝ができない場合にも対応できるように，他の宣伝の案も考えておく必要がある。V.E.L の活動の中で参加するイベント等で Winter Live 事業について宣伝をできたことは良かったので，来年度も継続していきたい。

8　その他

特になし

9　事業実施時の写真



病院訪問の様子



プレイベントの様子①



プレイベントの様子②



LIVE 当日の様子



全体曲リハーサルの様子

（２） 弘大囃子組（弘前大学）

１　事業名称

囃子で地域活性化大作戦！

２　事業の遂行の概要

7 月に弘前大学で行った横笛講習会では学生や教職員のほか，弘前市民の方々に笛の指導をした。

また，弘前市内で行われる祭りやイベントへの参加，福祉施設や児童施設への訪問・演奏を通して，囃子の演奏を楽しんでいただき，イベントの盛り上げと青森の祭りの認知を上げる活動を行った。また，楽器の体験を同時に行うときもあった。

イベントの参加や施設の訪問をするに当たり，演奏技術の向上を目的とした練習を週 3 回程度大学構内で行った。

３　事業の期間

令和元年 7 月 5 日から令和元年 12 月 31 日まで

・横笛講習会　（7 月 3 日，17 日，19 日）
・千年児童センター　（7 月 6 日）
・NPO 法人ありんこ　（7 月 6 日）
・三岳児童センター　（7 月 20 日）
・城南サマーフェスタ　（7 月 28 日）
・青女子盆踊り　（8 月 14 日）
・きらら納涼祭　（8 月 17 日）
・三省地区祭り　（8 月 17 日）
・千年地区敬老会　（8 月 22 日）
・国吉町会　（8 月 25 日）
・三中同窓会　（9 月 9 日）
・国吉町会登山　（9 月 10 日）
・城東敬老会　（9 月 15 日）
・大清水ねぷた運行　（9 月 21 日）
・りんご公園　（9 月 22 日）
・時敏小学校　（11 月 9 日）
・新和公民館祭り　（11 月 23 日）
・サンパレス秋田屋　（12 月 10 日，19 日）

4　事業の参加者

弘大囃子組の所属メンバー・講師（下山さん，竹浪さん）

5　事業の遂行による成果

囃子方が不足している地域の祭りへの参加により，祭りを盛り上げ，よりよい行事にすることをサポートすることができた。また，イベントや福祉施設への訪問演奏では囃子に馴染み深い方も多く，喜んでいただくことができた。中には昔を思い出して踊ったり，囃子の中のかけ声を唱えたりしてくださる方々もいた。

また，児童施設への訪問では，子供たちの前で囃子を演奏した後に塩ビ管の笛や灰皿の鉦を使った楽器体験の時間を設け，実際に囃子に使う楽器に触れてもらうことができた。子供たちは予想以上にとても熱心に笛を吹いたり打楽器を鳴らしており，いきいきと囃子に親しんでもらうことができた。このように楽しく囃子に触れた経験は，今後の囃子や祭りへの関心につながっていくと考える。

横笛講習会では，ねぷた祭りに向けて大学構内でねぷた囃子の笛の指導を行った。その際に，大学ねぷたの運行とそれまでの練習への参加を呼びかけたことにより，横笛講習会参加者の大学ねぷたへの参加が多数みられた。

6　事業に対する補助金の交付の効果

この事業は，様々な場所での演奏や講習会が主軸となっているが，自主財源だけでは移動費などをまかないきることができない。補助金により活動の幅は広がり，より意義のある事業にすることができた。

7　反省点・改善点

● 反省点

・横笛講習会以外の子供に対する楽器体験の際に，大学ねぷたや練習への誘導をあまり行えなかった。

・演奏依頼に行く際，演奏面で講師の方々の力を借りて演奏することが多く，囃子組の学生メンバーの演奏技術の向上の必要性が感じられた。

● 改善点

・子供に対する楽器体験を行う場合は，紙媒体など，形に残るもので参加を促すなどの方法をとる。

8　その他

特に無し

9　事業実施時の写真



7 月 6 日　千年児童センターでの演奏



7 月 17 日　横笛講習会



7 月 20 日　三岳児童センターの楽器体験



8 月 17 日きらら納涼祭



8 月 25 日　国吉町会での演奏



11 月 9 日　時敏小学校の楽器体験

（３）弘前大学ストリートダンスサークルＡ．Ｃ．Ｔ．（弘前大学）

１　事業名称

弘前大学ストリートダンスサークルＡ．Ｃ．Ｔ．定期公演『ＳＴＥＰ　ｖｏｌ．１２』

２　事業の遂行の概要

弘前大学ストリートダンスサークル A.C.T.の定期公演『STEP vol.12』を，ショッピングモールかつ公共施設であり，弘前市民が集まりやすいヒロロの４階にある弘前市民文化交流館ホールで開催した。また，ポスターを作成し，市役所や青森武道館などの公共施設や，ヒロロはもちろんのことイトーヨーカ堂や中三などのショッピングモールでの掲示を依頼し，多くの人々への告知を目指した。

３　事業の期間

令和元年 12 月 29 日(日)

４　事業の参加者

公演来場者　　２４１人
（うち赤ちゃん１人　大人子供別の把握はできず）
公演参加者　　７７人
会場スタッフ　　３人　カメラマン　１人

５　事業の遂行による成果

事業の目的は，弘前大学ストリートダンスサークルＡ．Ｃ．Ｔ．の定期公演をより多くの市民に見に来ていただき，市民にストリートダンスやストリートカルチャーに対しての理解や興味をもっていただくとともに，公演を通して市民との交流の場を設けるということであった。

結果としては，まず来場者は２４１人まで達した（椅子使用時の会場の定員は３００人で，当日は会場の約半分を客席として用意した)ため，目標を達成することができたと考える。次に，アンケートの結果で，公演の満足度を問う質問に対して「とても満足」と答えた人が回答者の 78%，「やや満足」と答えた人が 8%という結果となり，回答者の約 9 割がおおむね公演に満足したといえるため，この公演が市民にストリートのダンスやカルチャーに対しての理解や興味をもっていただく端緒となったと考える。また，アンケートの回答者の職業を問う質問の結果で，回答者の 2%が小学生，3%が中学生，12%が高校生，4%が専門学生，17%が大学生・院生(弘前大学)，8%が大学生・院生(弘前大学以外)，49%がそれ以外となり，学生でない人たちを中心に幅広い職業・年齢の人々にご来場していただいた。しかし，今回はサークル員の意向で，大学生とそうでない人々が交流できるようなコンテンツを特別に用意することはしなかったため，明確な交流の場を設けることはできなかった。ただ，幅広い職業・年齢の方々が集まる空間をつくることはできた。

６　事業に対する補助金の交付の効果

補助金の交付を受けたことによる効果として，金銭的な部分での効果とイベントに対する意識やモチベーションの部分での効果の二面があった。

金銭的な面では，ここ数年のサークルの取り組みにはなかったポスターの製作に踏み込めたこ

と，また，出演者と来場者に傷害保険を掛けて例年では疎かにしがちな安全面に配慮することができたこと(実際にはポスター，傷害保険ともにそれぞれ交付決定額の１割にも満たない額であったが)，さらに会場の備品代にかけることのできる金額を多めに配分することができた(例年よりも１万円程度多めに設定した)ことで，舞台照明に力をいれることができた(実際に例年よりも１万円弱高い金額となった)ことの三つである。

イベントに対する意識やモチベーションの面については，例年よりも一般向けのイベントにし，地域の活性化に貢献したいという目的をもとに，大学コンソーシアム学都ひろさきという公的な機関から支援をいただいてイベントを開催することができた(ここ数年は身内向けのイベントとなる傾向が強く，かつ出演者からの集金をあてに開催していた)ことで出演者一人一人の責任感やモチベーションを高めることができた。また，幅広い範囲のターゲットではあるが，ダンスと関わりのうすい市民(老若男女問わず)を主な対象として設定したことで，告知の仕方やポスターのデザイン(ダンスのイベントというのが一目で伝わり易く，かつクールで目を引くデザインになるよう工夫した)，会場の構図(来場者が見るだけでなく一緒に盛り上がる雰囲気をつくるために。ステージをフラットな状態にしたりステージを囲むようにイスを配置したりした)など細かいところ一つ一つの事柄に気を配り，工夫することができた。

さらに，効果測定をする必要があるため，ここ数年では実施できていなかったアンケートも作成したことで，客層や来場者の人数などの一つの指標をサークルの後輩の代に示すことができた。

７　　反省点・改善点

反省点・改善点として三つ挙げられる。

一つは，アンケートの質問が不十分な内容であったことである。ストリートダンスやストリートカルチャーと関わりのうすい市民にとってそれらに対する理解や興味が深まる場を設けることを大きな目的の一つとしていたが，それに対しての明確な成果をはかるアンケートの質問がなかった。「５　事業の遂行による成果」で述べたように，公演の満足度である程度は成果をはかることはできたが，あくまでも公演のみの対しての満足度であり，ストリートダンスやストリートカルチャー全体に対する理解や興味が深まったかどうかはわからないため，アンケートにそれを明確にはかることのできる質問をいれるべきであった。また，事業実施で得られる効果として考えていた，若者の弘前に対する愛着を高めることができるということに関しても，公演の満足度に関しての質問があったことと出演者の達成感は実際大きなものであったとうかがえたことは実情としてあるが，数値として明確にそれを表すことのできるものがなかった。さらに，得られる効果として，市民がストリートダンスを始めるきっかけをつくることで健康づくりに寄与できるということも挙げていたが，ストリートダンスを始めたいと思ったかどうかを明確にはかるものもなかった。

二つ目は，「５　事業の遂行による成果」でも述べたが，公演を通して市民との交流の場を設けるという目的に即したコンテンツを用意することができなかったことである。例年ではそのようなコンテンツを取り入れていないということもあり，来場者が参加できるコンテンツ(例えば簡単なダンスをレクチャーするなど)に対しての出演者のモチベーションを高める

ことができなかった。アンケートにも，一般の人が参加できるような当日イベント入れてはどうかとの記述が一件あった。次回は，来場者(特にダンスと関わりのうすい人々)が参加でき，かつ出演者も進んで実施できるようなコンテンツを考えたい。

三つ目は，ポスター製作費に関して，依頼先の会社からいただいた見積もりが，交付が決定された補助金の配分の金額の二倍であったことである。本来は，依頼先の会社から提示された見積もりの金額が材料費とデータの校正にかかる費用合わせての金額で，１０，０００円程度であったが，補助金として交付が決まった金額の配分が５，０００円であったため，それを依頼先の会社にお伝えしたところ，ご厚意で約半額の金額で収めていただいた。補助金申請の段階で材料費と校正代がかかることをもっと理解し，それが伝わるような記述をするべきであった。

８　その他

補助金以外の費用で，サークル員の知り合いのカメラマンに撮影していただいた(事業実施の様子を写した写真というよりは，作品としての写真)。

また，サークル員かつ出演者の中にエナジードリンク『レットブル』の学生サポーターがおり，そのサークル員の活動として『レットブル』を出演者・来場者に無料で配布した。

９　事業実施時の写真



開演前の会場の様子



公演プログラム実施の様子

（４）益川ゼミナール及び弘前大学バスケットボール部（弘前大学）

１　事業名称

インクルーシブを意図したバスケットボール教室

２　事業の遂行の概要

全２回のバスケットボール教室を企画した。本年は全２回であるが，今後は回数や他のスポーツなどの波及を考えている。内容として，教室で行うプログラムの提案をゼミ指導教員（益

川）や特別支援学校：体育教員（附属特別支援学校）に協力を得て検討を行っていった（6・7月）。そのプログラムに則り，運営を行っていった。小学生及び特別支援学校の児童を対象とする活動であり，より高い安全管理が必要であるため，施設や運営の安全管理のシュミレーションを行った。

3　事業の期間

2019年8月24日，2019年10月26日

4　事業の参加者

益川ゼミナールのゼミ生徒，弘前大学バスケットボール部部員，弘前市内の小学生及び特別支援学校の児童

5　事業の遂行による成果

インクルーシブ教育を意図した指導とはどのようなものなのかを疑問に抱いたことと，青森県は「短命県」と呼ばれており低年齢からの「健康教育」が本学でも重要な研究領域とされていることから，この企画を考え実行した。これまでは個人や，同じ校種の子どもたちを相手にバスケットボール教室等の活動をしてきたため，今回の教室のように健常児と障がいのある子どもが一緒になって行う教室は初めてであった。

いざ開催してみると，最初は健常児たちが障がいのある児童に対して戸惑いや壁を感じているようにも見えたが最後のゲーム形式の活動ではその壁を感じさせることなくチームの一人として迎え入れ楽しく運動していた。

事業計画を提案した際に，アンケート等をして運動に対する意欲や運動有能感が上がったかなど調査しても良いのではというアドバイスを頂いたためアンケートも実施した。結果はバスケットボール教室を行った前と後では運動に対する意欲が高まったという結果が得られた。

さらに私たち保健体育を専攻するもの，教員を目指す者としてもインクルーシブ教育に対する考え方が変わったり具体的なアプローチの仕方を多角的に考えたりするいい機会にもなり，とても勉強になった。反省点も多く見られたが，今後の活動にも活かせるいい機会になったと考える。

6　事業に対する補助金の交付の効果

・スマイルボールの購入・使用により，特別支援学校の児童や低学年の児童もボールに対しての恐怖心もなく，バスケットボールを楽しむことができた。
・実際にケガもなく，バスケットボール教室を終えることができた。

7　反省点・改善点

・バスケットボール教室の日程を大学生の都合に合わせて設定してしまったので，小学生が集まりにくい日に開催してしまった。
・小学生の日程をより早く把握する必要があった。
・宣伝が遅かったために，想定していた人数よりも少なかったので，もっと早い告知・宣伝を

行うべきであった。
・経験者と未経験者・特別支援学校の生徒がともに楽しめるメニューをもっと多く用意するべきであった。

8　その他

特に無し

9　事業実施時の写真



挨拶をしている場面



バスケ部員がドリブルを教えている様子



集合写真

（５）弘前医療福祉大学救急救命研究会（弘前医療福祉大学）

1　事業名称

弘前市内教育機関に勤務する養護教諭等を対象とした救急救命（プレホスピタル）に関する研究・調査事業

2　事業の遂行の概要

令和元年 7 月 10 日～9 月 20 日　救命講習会募集期間
令和元年 9 月 26 日　第 1 回救命講習会当日（本講習会後に事後アンケート配布・回収）
令和元年 10 月 19 日　第 2 回救命講習会当日（本講習会後に事後アンケート配布・回収）
令和 2 年 1 月 10 日　全事業完了

3　事業の期間

令和元年 7 月 10 日～令和 2 年 1 月 10 日
講習会開催日　令和元年 9 月 26 日（木）
令和元年 10 月 19 日（土）

4　事業の参加者

事業参加学生 29 名（男性 24 名　女性 5 名）
準備期間参加学生 10 名
講習会参加者 35 名（第 1 回講習会 16 名　第 2 回講習会 19 名）
小学校教諭 8 名・中学校教諭 6 名・高校教諭 3 名・弘前大学養護教諭養成課程学生 18 名

5　事業の遂行による成果

本事業は，弘前市教育機関に勤務する養護教諭及び養護教諭を目指す学生を対象とした救命講習会で，応急手当やファーストエイド，緊急時の対処法の普及啓発活動を行うとともに，地域住民の救急救護に対する知識・技術の向上，および救急活動への理解を深めることが目的である。

今回実施した講習内容は，昨年度に実施した講習会をブラッシュアップし，継続事業として企画したものである。昨年度実施した講習会の事後アンケートから「トリアージの判断について詳しく学びたい」「事故事例を多く取り上げて欲しい」「実際の校内での動き方を学びたい」との要望があったため，今年のプログラムには「トリアージ」「体験型シミュレーション」を取り入れた講習内容とした。「体験型シミュレーション」は本学の教室や階段を活用し，本学の学生が怪我をした児童生徒役や保護者役を演じることで，校内で生じ得る緊急事態を実際に再現し，受講者には養護教諭として対応してもらう演習訓練である。

「体験型シミュレーション」を行うにあたり，医学的な知識や観察が必要になることから専門的な観察方法や病態については事前講義を行った。その結果，講義で学んだ医学的な知識を用いて「体験型シミュレーション」を行うことで知識・技術の定着化を図ることができた。

本講習会後に受講者にアンケート調査を実施したところ，「講習内容は理解できましたか」という質問に対して，「はい」と回答した人が全員であったことから，「体験型シミュレーション」を取り入れたことにより，一定の満足感や評価を得られたものと考えられる。

次に「養護教諭が緊急度判定を行うことで，役に立つことは何ですか」という質問に対して，9 割の人が「迅速な 119 番通報」と回答した。このことから，今後は迅速な「緊急度判定」・「トリアージ」や「早期の 119 番通報」が期待される。

次に「講習内容で業務上，役に立つと思ったのは何ですか」という問いに，約 9 割の人が「体験型シミュレーション」「緊急度判定（初期評価）「緊急度判定（全身観察）」が役に立つと回答した。

このことから，今年度初めて取り入れた「体験型シミュレーション」と，昨年度から継続し行った「緊急度判定(初期評価・全身観察)・トリアージ」はどちらも養護教諭にとって有益な学習となったと考えられる。

また，今年度新たに対象に加えた弘前大学教育学部養護教諭養成課程の学生は，心肺蘇生法

や緊急度判定などの知識・技術の習得に加え，講習会を通じて現役の養護教諭らと意見交換を行うことができ，学生の段階から救急救命(プレホスピタル)に対する意識を高めることができたと考えられる。

さらに，本学の学生にとっても，指導者として受講者に指導するという貴重な学びを得たことで自身の知識・技術の再確認を行い更なる知識の定着を図り，受講者の理解度を深めるためには何をするべきなのかを真摯に考えることで,より良い救命講習会を開催することができた。

今回，取り上げた「体験型シミュレーション」を通じて，教育機関で勤務する現役の養護教諭と本学の学生が互いの分野を活かし意見交換を行うことで，様々な観点から緊急事案における対応を見直すこととなり，救急活動の幅が広がったと考えられる。

6　事業に対する補助金の交付の効果

昨年度の事業完了報告書にて，会場を本学施設に移し複数回開催することに関しての規則改定についてお願いをしたところであり，今年度からそれを反映頂いた結果，施設借用費用を他の必要経費に充当する事が可能となった。その結果，今年から新たに取り入れた「体験型シミュレーション」の際に使用する消耗品の充実化が図れ，状況設定(実際の現場を想定した環境設定)の質の向上に繋がった。会場設営等も本学の物品を用いて準備できたことから，より充実した講習会を企画することができた。さらに，開催日を 2 回としたことでより多くの受講者の参加を募る事が可能となり，受講者数は昨年度の 21 名から 35 名と約 1.5 倍となった。本学施設利用を許可して頂いたことによる会場の規模拡大に伴い，必要資器材も増加する中，過不足なく資器材が充足した事は補助金の交付の効果であると考える。

7　反省点・改善点

反省点としては，本学施設で開催する事から大学側で加入しているイベント･傷害保険等が適用されるものと勘違いしたことから，講習会参加者に必要であったイベント保険に未加入であった。講習会終了後に学生のみ適応であることが判明した。この件に関して，猛省し次開催時にはしっかり確認を取ったうえで講習会開催に臨みたいと考えている。

改善点としては，1 回目の講習会の事後アンケートから「実践する前にどんな物品があるかを知りたかった」「部屋に移動する前に事前の状況説明が欲しかった」などの要望があった。この意見を踏まえて 2 回目の講習会に備えたフィードバックを行ったが，学生の想定を超えるような様々な要望や要求に十分に対応できなかったため，講習会参加者に不満の残る結果となったと思慮された。

今後は，この結果を踏まえて，事前に「体験型シミュレーション」のプレテストを行い，必要資器材の把握や状況設定の精度を向上させていきたいと考える。加えて，各ブースの症例進行や重要事項を全体に周知することで「体験型シミュレーション」全体の時間管理を併せて共有できるシステムを構築していく必要があると考える。以上を，今後の改善点として取り入れていきたい。

また「体験型シミュレーション」は今年度からの取り組みであり，講習会参加者からは前向

きな意見も多くいただいたが，本学の学生の演技力や，状況設定など至らない点も多くみられた。回数を重ねる毎に習熟度の増高が見込める事から，今後は学内演習を通じて「体験型シミュレーション」の内容のブラッシュアップを重ね，講習内容の充実化を図っていきたい。

8　その他

今回のように講習会を 2 回開催するという取り組みは初めてであった。日程調整を行う事で多くの受講者の参加を募ることが可能となった。また，本学施設を会場として開催することで，大学施設内の階段や教室を使用して実際の校舎で想定されうる状況を再現した「体験型シミュレーション」を行うことが可能となった。

また，今年度から新たに対象に加えた弘前大学教育学部養護教諭養成課程の学生にとっては，養護教諭を目指す学生が現場で働く前から救急救命(プレホスピタル)に関する知識・技術の向上させる機会となり，学生時代から有事の際の対処方法への理解が期待されることとなった。さらに本講習会を通じて，実際に教育機関で勤務している養護教諭との情報交換や実状をうかがい知るきっかけとなったことから，より救急救命に対する関心を深めることに繋がったものと考えられる。

9　事業実施時の写真



←今回参加した本学救急救命研究会の学生



↑体験型シミュレーションで、熱中症疑いの模擬患者に対して初期評価を実施している様子



↑学生がスライドとデモンストレーションを用いて、心肺蘇生法について説明している様子



↑本学の学生を模擬患者と想定して、緊急度判定（全身観察）について指導している様子



←体験型シミュレーションで階段から転倒した際の頭部外傷に対する処置を実施している様子

３．成果発表会

事業の終了報告として，各学生団体が実施した事業の成果等を広く知ってもらうため，成果発表会を開催した。また，当日の発表会運営を本コンソーシアムの学生委員会「いしてまい」が行った。

（１） 概要

日　時：令和２年２月２６日（水）
　　１３時００分～１６時００分
場　所：土手町コミュニティパーク　多目的ホール
対　象：市民，学生，大学・行政関係者等
　　（入場無料，申込不要）
来場者：約４０名
主　催：大学コンソーシアム学都ひろさき
共　催：弘前市



成果発表会チラシ

（２） 発表会の様子

第１部　　ステージセッションの様子



１　アカペラサークルＶ．Ｅ．Ｌ


２　弘大囃子組


３　ストリートダンスサークルA.C.T.



４　益川ゼミ及びバスケットボール部



５　救急救命研究会


司会をする学生委員会「いしてまい」

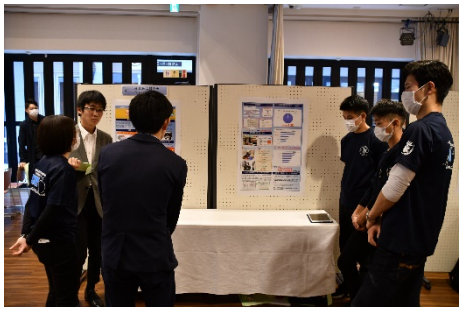
第２部　　ポスターセッションの様子













表彰（審査）

今年度採択された学生団体の事業内容や成果発表会での発表の様子等を審査し，点数が高い学生団体の順に「最優秀賞」及び「優秀賞」を表彰する。

○ステージセッションでの審査

審査員（１０名程度）による審査で，事業内容や発表能力等について，５つの審査項目で，０点～３点の４段階で採点する。

＝審査項目＝

① 学生だからこそ実施できた独自のアイデアで溢れる事業か。

② 地域課題の解決や地域の活性化に繋がる活動であったか。
（地域や市民への貢献性の高い事業であったか。）

③ 費用と効果，成果のバランスが取れているか。（費用対効果の高い事業であったか。）

④ 地域貢献に対する検証がされているか。

⑤ 与えられた時間を有効に使い，事業概要や事業成果をわかりやすく発表ができているか。

○ポスターセッションでの審査

参加団体の学生や運営学生を含む来場者全員による審査で，次の３項目に留意し，最もよい事業を実施したと思う学生団体を１つ選ぶ。

○「最優秀賞」・「優秀賞」の決定について

ステージセッションでの審査の合計点数及び来場者投票で選ばれた数（○１つにつき，１点）の合計点数が高い学生団体の順に「最優秀賞」・「優秀賞」を表彰する。

審査結果

○最優秀賞：救急救命研究会（弘前医療福祉大学）
○優秀賞　：アカペラサークル V.E.L（弘前大学）



（審査員による）講評

○様々な地域活動を通して地域に貢献出来ていたと思う。今後は事業を実施するだけでなく，来場者等に聞き取り等を行うことで情報を集め，次の活動へ繋げて欲しい。

○ほとんどの団体が課題設定に苦労したと思うが，自分たちの活動内容を地域課題にリンクさせ，独自の活動として展開しており良かった。

○ある地域の課題は別の地域でも課題になっていることが多いので，幅広い視点で今後の活動に繋げて欲しい。

○収集したデータの見せ方を工夫し，客観的に示すことでもっと伝わりやすい成果発表になると思った。どれも素晴らしい活動なので集めたデータを次に活かして欲しい。

○これらの活動が社会教育・地域交流の活発化に繋がると感じたので継続して欲しい。

○自分たちの活動が地域にどのような影響を与えたのか，その考察を行うことで次の展開に繋げることができるので，次回はこの点を大事にして欲しい。

○今回収集したアンケートや聞き取りのデータを元に次回へ活かして欲しい。また，次回のデータが揃えばさらに比較・検討ができるので，新たな展開へ繋げて欲しい。

４．新聞記事

弘前で大学コンソーシアム発表会
5団体 地域活動で成果

弘前市内の大学が連携し地域発展を目指す「大学コンソーシアム学都ひろさき」の学生地域活動支援事業成果発表会が26日、土手町コミュニティパークで開かれ、各大学の学生団体が活動内容や成果を報告した。

コンソーシアムでは学生が持つ柔軟な発想やアイデアを生かし、地域振興につなげようと学生団体を支援。発表会では2019年度事業に採択された弘前大学、弘前医療福祉大学の5団体が活動成果を発表した。

弘前大学のサークル「弘大囃子組」は、津軽地方に伝わるねぶた囃子や登山囃子などの継承、演奏による地域活性化への貢献を目的とした「囃子で地域活性化大作戦」と題した事業について発表した。

補助金の効果については「交通費の支給で行動範囲が広がり、外部講師を招いたことで演奏技術が向上した」とし、成果として「講習会の開催で多くの人にねぶたや囃子への興味を深めてもらうことができ、囃子方が不足している地域の祭りに参加し、盛り上げに一役買えた」などとした。（外崎陸）



学生らが取り組みの成果を紹介した発表会

陸奥日報社提供

令和２年３月１日（日）１４面

５．事業成果

今年度は，前年度からの継続団体が３団体及び新規団体が２団体の計５団体が同事業に申請した。それぞれイベントの実施や調査活動等，各団体の特徴を活かした学生ならではのオリジナリティ溢れる活動を弘前市内各所で行った。これにより，学生と地域の人との交流が新たに生まれ，活動を通して，自分達が生活する弘前市の新たな魅力や団体の今後の目標や課題の発見につながったと考える。

６．次年度以降の実施に向けた改善点

地域に出て活動をする学生に積極的に同事業を活用して欲しいが，ここ数年，申請件数が５件と横並びで少ないため，申請件数の増加を目指し事業の周知に力を入れていきたい。また，学生団体の活動をより多くの人に周知するために，特に高校に対しての情報発信を強化していきたい。

【参考】同事業の要項

（１）応募できる団体

学生で構成される団体(ゼミ，研究室，課外活動団体等)で，次の要件の全てに該当するもの。なお，既存の団体のほか，新たに組織する団体も対象とする。

・学生の活動を教員が実質的に指導していること。(名義のみの顧問は不可とする。)
・構成員が概ね５人以上であること。
・コンソーシアム構成大学の学生で組織された団体であること。

（２）対象事業

弘前市の地域活性化や地域課題の解決を目的に実施する事業で，次に掲げる要件の全てを満たしているもの。

・弘前市内で実施される事業であること。
・弘前市民を対象にした事業であること。
・令和元年１２月３１日で完了する事業であること。

（３）補助金額と補助対象経費

① 補助金額

・単一の団体が事業を行う場合：上限１００，０００円
・異なる大学の団体が連携して事業を行う場合：上限２００，０００円

② 補助対象経費

事業を実施するために直接必要な経費とする。
（講師等謝礼，旅費，消耗品費，原材料費，燃料費，印刷製本費，通信運搬費，保険料，会場等使用料，賃借料及びその他本コンソーシアム会長が適当と認めたもの）

（４）事業審査及び審査基準

応募書類及び申請団体へのヒアリング等を実施し，次の１０項目について審査し，決定する。

○的確性　○効果性　○適切性　○自主性　○実現性
○公益性　○地域性　○費用妥当性　○将来性　○独創性

令和元年度活動報告

Ⅱ．連携推進事業

６大学合同シンポジウム

１．趣旨

来場者が興味を持ちやすいテーマを設定し，市民向けの公開シンポジウムを開催する。また，会場内でコンソーシアムのパネル展示等も併せて行い，コンソーシアムをより多くの人に知っていただけるようＰＲ活動をする。

２．概要

○テーマ

「弘前を担うひとづくり　～地域と大学生のかかわりあいを通じて～」

○内容

人口減少・少子高齢化と，目まぐるしく変わる地域社会に対応しつつ持続的に発展していくためには，地域を担う人材を育て将来も活力ある地域づくりを進めていく必要があります。

このような状況のなか，学生の地元定着をどう図るか，地域での働く場を確保するための学生と地域企業とのマッチング等，地域を担う人材の育成について考えるために，ＮＰＯ法人プラットフォームあおもり理事長　米田　大吉氏に講演をしていただいた後，パネルディスカッションで議論を深めます。





シンポジウムチラシ

○日時

令和２年１月２５日（土）

１３時３０分～１６時００分

○場所

土手町コミュニティパーク　多目的ホール

○基調講演講師

米田　大吉　氏（ＮＰＯ法人プラットフォームあおもり・理事長）

○パネルディスカッションパネリスト

米田　大吉　氏（ＮＰＯ法人プラットフォームあおもり・理事長）

辻 正太　氏（株式会社ＢＯＬＢＯＰ・代表取締役）

金ヶ崎　七虹　氏（弘前学院大学・２年）

小笠原　僚祐　氏（青森中央学院大学・２年）

鎌田　翔至　氏（弘前大学・２年）

○来場者

６０名（市民，学生，大学関係者，行政関係者等）

○共催

弘前市

３．シンポジウムの様子

【総合司会】長谷川　直生

（弘前大学社会連携部社会連携課社会連携グループ課長・大学コンソーシアム学都ひろさき企画運営委員）

基調講演

「学生×企業×地域のマッチング」

～気がついていない魅力と，積み残される課題～

講師：米田　大吉　氏（ＮＰＯ法人プラットフォームあおもり・理事長）

「学生×企業×地域のマッチング～気がついていない魅力と，積み残される課題～」をテーマに，ＮＰＯ法人プラットフォームあおもり 理事長 米田 大吉氏を講師に迎え，「この地域は担う価値がある地域なのか。」「企業は存続するためだけが目的になっているのではないか。」「学生は学ぶことだけで成長できると勘違いしていないか。」といった問題を投げかけた。

また，「人が減ることを前提として，豊かな地域をつくることができるかどうか，また，地域の強みを活かすことに加え，産業を作ることや，育てることが課題。」「学生の魅力は何も知らないこと。経験に良い経験も悪い経験もない。経験値の厚さがパワーになる。」「起業してみて失敗しておくことも経験になる。」と述べられた。



米田　大吉 氏



ご講演の様子



学生から新鮮な質問も寄せられた。

パネルディスカッション

「学生のライフデザインと地域づくり」

パネリスト：米田　大吉　氏（ＮＰＯ法人プラットフォームあおもり・理事長）
辻　正太　氏（株式会社ＢＯＬＢＯＰ　代表取締役）
金ヶ崎　七虹　氏（弘前学院大学　２年）
小笠原　僚祐　氏（青森中央学院大学　２年）
鎌田　翔至　氏（弘前大学　２年）

コーディネーター：弘前大学人文社会科学部　教授　森　樹男
（大学コンソーシアム学都ひろさき企画運営委員長）

「学生のライフデザインと地域づくり」をテーマに意見交換を行った。就職観について，学生パネリストとして登壇した，金ヶ崎氏は，「人の役に立つ仕事をしたい」「働く上で，自己肯定感

が大事だと思うこと，また，自己肯定感を人に伝えられる仕事に就きたい」と述べ，小笠原氏は，「まだ何をしたいのかはわからないが，何かしたいという目標がなくても，選択できる環境を作ることが大切だと思う。」と述べた。更に，鎌田氏は，「自分のやりたいことができるようになるため，スキルアップとして就職しようと思う。」とそれぞれの考えを述べた。



パネルディスカッションの様子



弘前学院大学２年
金ヶ崎 七虹 氏



青森中央学院大学２年
小笠原 僚祐 氏



弘前大学２年
鎌田 翔至 氏

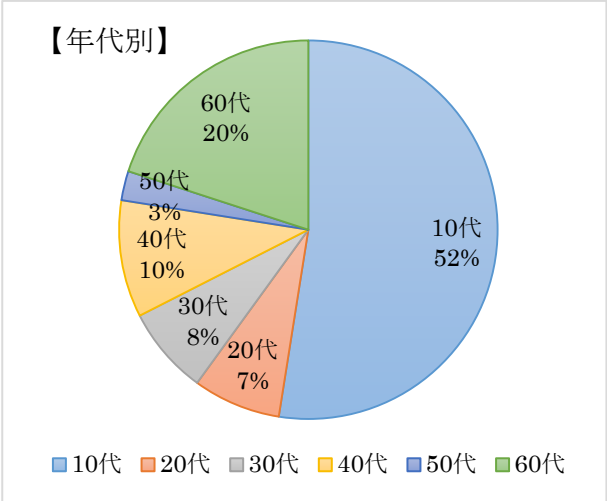
５．アンケート

○来場者数　　：６０名
○アンケート回答者数：４０名
○アンケート回答率　：６６．６７％

○回答者内訳

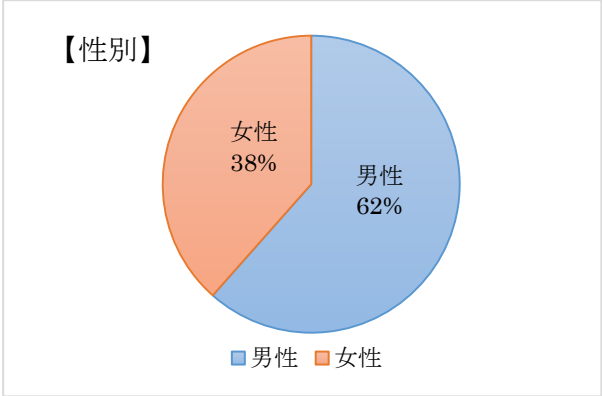
【年代別】

	回答者数
１０代	２１
２０代	3
３０代	3
４０代	4
５０代	1
６０代	8
計	４０



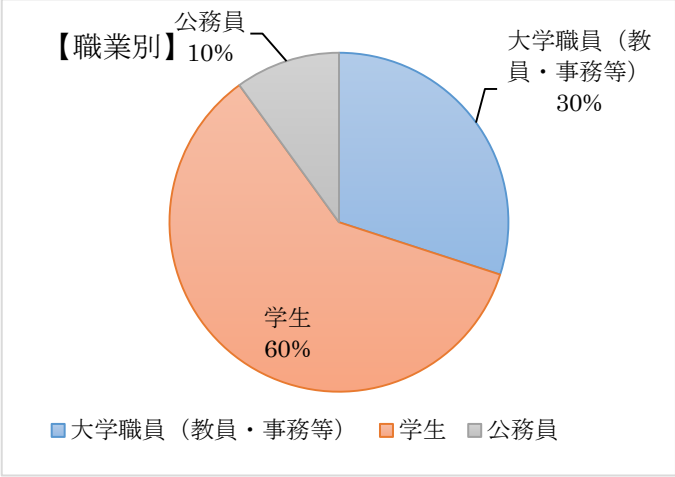
【性別】

	回答者数
男性	２４
女性	１５
無記入	1
計	４０



【職業別】

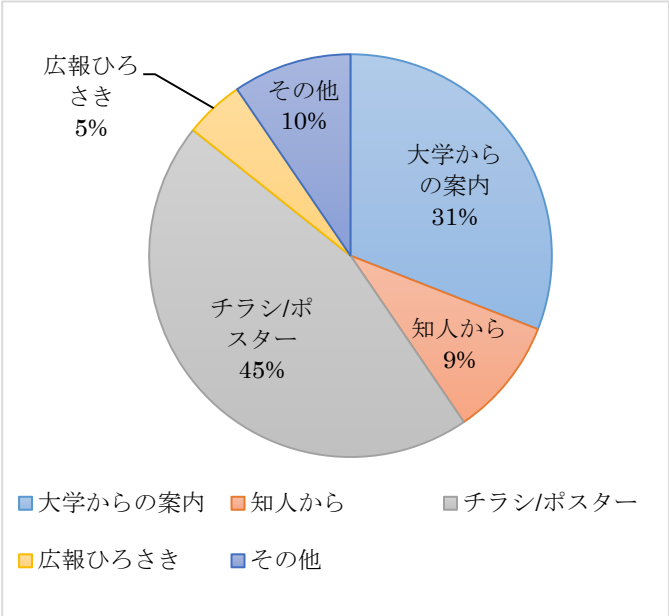
	回答者数
大学職員（教員・事務等）	１２
学生	２４
公務員	4
無職	0
会社員	0
自営業	0
パート・アルバイト	0
無回答	0
計	４０



○今回のシンポジウムを何で知ったか。

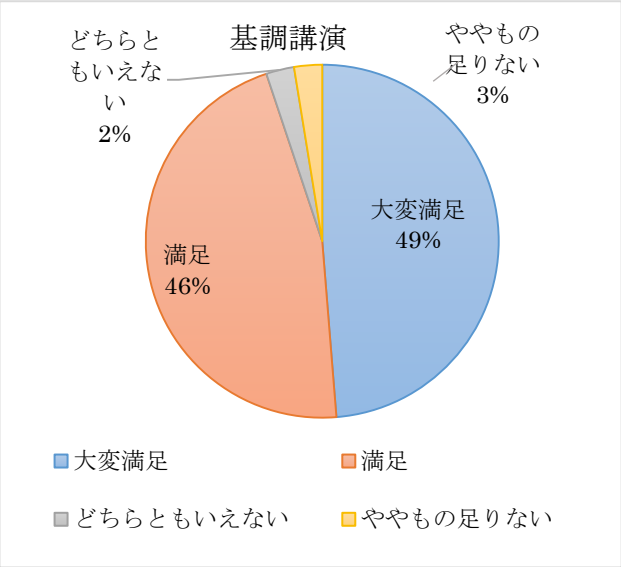
	回答数
① 大学からの案内	１３
② 知人から	4
③ チラシ・ポスター	１９
④ 広報ひろさき	2
⑤ ＳＮＳ・ブログ	2
⑥ 前回（学生団体シンポジウム）	1
⑦ 企画委員会	1
⑧ その他	4
計	４６

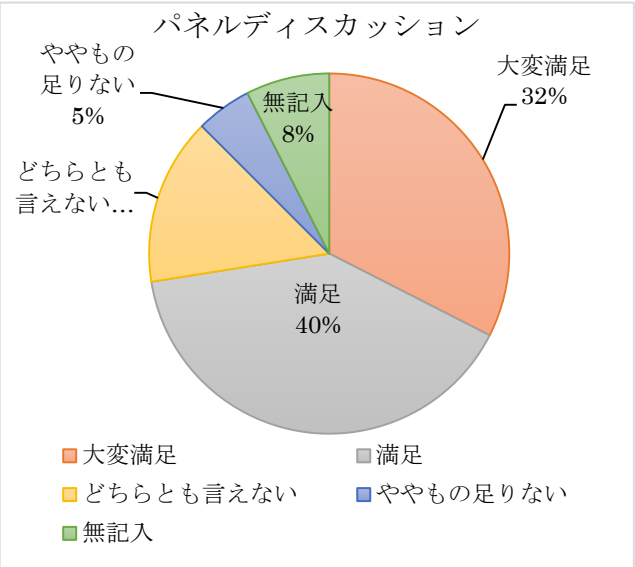
※複数回答あり



○各プログラムについて

	【基調講演】	【パネルディスカッション】
① 大変満足	１９	１３
② 満足	１８	１６
③ どちらとも言えない	1	6
④ ややもの足りない	1	2
⑤ もの足りない	0	0
⑥ 不参加	0	0
⑦ 無回答	1	3
計	４０	４０





○感想等

【シンポジウム感想等】

・自分の考えの軸が変わった気がします。今までこれからのためにやらなければいけないからやれと言われていたことを自分でやりたいと思ったようになりました。改めて自分のやりたいことを考えてみたいと思いました。今，学校で行っている。探求活動も地域に関することなので，とても有意義な時間を過ごせました。基調な機会をありがとうございました。
・自分たち（今の世代の学生）の欠点だと思っていた，何も知らない力が魅力だと言われ，驚いた。経験しようと思っても，失敗を恐れていたから，経験によし悪しはないということを大切にしたい。パブロフの犬になりたい。自分は人のために働きたいと思っていいたけど，具体的なことを考えていなかったなと思った。考える機会になった。
・自分の固定概念が変わりました。これから頑張ります。
・このような機会が存在することが重要。
・大学生の地域づくりの本音を聞けて良かったと思う。進路決定にもつながった。
・地域についてこんなに深く考えることがなかったので，新鮮でした。高校から大学への進路でも大学から企業に就職するときと同じなのが気になりました。
・経験に基づいて話しているので，説得力がある。２０４０年の人口の推移は参考になりました。言葉遣いがやや悪いです。
・今後具体的な町おこしの例を知りたいなと思いました。最初の講演がためになりました。
・将来の職業について大変参考になった。
・知らないことについて知れて良かった。他人の意見で自分なりの考えを持つことができて良かった。
・世代によって考えていることの違いがうかがえ，共感できることもあり面白かった。
・地域に若者を引き付ける何かを作りたいです。
・今日は企業と地域という面から多くのことが知れたので，次回も機会があれば参加したいと思います。
・高校の授業で地域活性化について，研究しているので，いいヒントをたくさんいただきました。
・地域を担うためには，まずその地域の現状を知ることから始まると思いました。また，大学生の話を聞いて地域を担うことに対する意見が聞けて，改めて地域について考えることができました。
・パネルディスカッションを聞いて，大学生の意見や考えをたくさん聞くことができて良かったです。考えの視野を広めることができました。
・米田さんの講演がとてもよかったと思います。現状がよくわかりました。これから大変を大変にしないように考えたいです。いい機会となりました。
・そもそも担う義務を考えたことがなかった。そういうものだと思っているので，自分が思考停止していると思った。
・新しい視点に気づくことができました。
・自分のためになって良かった。

【要望等】

・パネルディスカッションの時間が足りなかった。
・授業や普段の学校では扱われないような内容が多く勉強になりました。学校でも地域に貢献するための活動などをしていますが，何をしていいのかわからないことがたくさんあるので，現

状だけではなく，若者たちに何を求めているのか具体的に話してほしいと思いました。
・大変ためになる内容だったと思います。パネルディスカッションはもう少し聞きたかったです。
・行政も参加できれば良かったと思います。

５．新聞記事



学生と地域や企業の関わり方について意見を交わしたシンポジウム

陸奥日報社提供

令和２年１月２６日（日）２面

学生と地域 関わり方は

市内6大学合同シンポ 就職観など考える

弘前

学生の地元定着と人材育成を考える、弘前市の6大学合同シンポジウム「弘前を担うひとづくり」が25日、土手町コミュニティパークで開かれた。学生と地域の関わり方について、参加者が講演やパネルディスカッションを通じて考えを深めた。

市内の6高等教育機関で組織する大学コンソーシアム弘前が開いた。

NPO法人プラットフォームあおもりの米田大吉理事長が「学生×企業×地域のマッチング～気がついていないとりが発信して意識形成すべき」などと論じた。

パネルディスカッションでは弘前大人文社会学部の森樹男教授をコーディネーターに、米田理事長、BOLB（本社東京都）の辻正太代表取締役、弘前学院大、青森中央学院大、弘前大の2年生3人が「学生のライフデザインと地域づくり」と題して討論。学生の就職観や働き方、地域参画の在り方などについて意見を交わした。（福田藍至）

６．事業成果

本年度は，パネリストとして学生３名に登壇していただいたことで，より多様な角度から意見が交わされた。来場者も学生が多く訪れたことにより，世代を越えた新鮮な交流となった。

また，会場を訪れた参加者からは，「改めて自分のやりたいことを考えてみたいと思った。」「高校の授業で地域活性化について探求しているので，いいヒントをたくさんいただきました。」などの意見があり，身近なテーマに多くの反響が寄せられ，大変有意義なシンポジウムとなった。

各大学公開講座等助成事業

１．各大学公開講座等助成事業とは

本コンソーシアムを構成する弘前市内６大学が行う公開講座等事業（以下「事業」）の実施を補助することにより，各大学の特色を活かしながら蓄積する知を広く市民に向けて発信・還元することで，高等教育機関が集結する「学都ひろさき」を強く印象づけるとともに，市民が本コンソーシアム及び大学を身近な存在であると感じ，市民による大学の活用を促すことを目的とする。

２．補助を行った事業

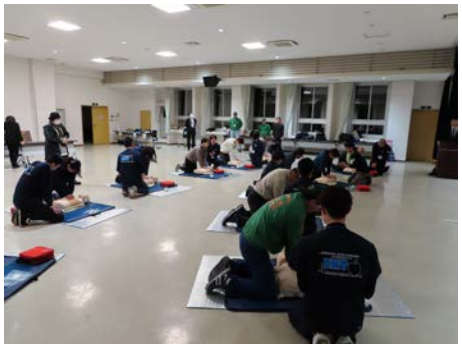
（１） 弘前大学人文社会科学部

事業名称	２０１９年度旧弘前藩藩校稽古館資料調査報告会
主催	弘前大学人文社会科学部 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
内容	弘前藩の藩校「稽古館」が所蔵していた古典籍資料は，現在，東奥義塾高校や弘前市立弘前図書館に保存されています。これらは江戸時代の津軽地域における人々の「知の体系」を解き明かすための貴重な文化遺産です。 弘前大学では，2014 年から調査研究を行い，毎年成果発表会を開催してきました。今年も，今年度調査における最新の成果を，各専門分野の教員がそれぞれの立場から報告いたします。また，今年は，日本近世史がご専門である大石学先生に，幕末の「教育力」について，大河ドラマなどを例にわかりやすくご講演いただきます。   講演会チラシ
日時	２０１９年１１月１７日（日）１３：３０～１７：００
会場	弘前市立観光館１階　多目的ホール（青森県弘前市下白銀町）

実施状況等	○参加人数：９３名 講演会の様子      

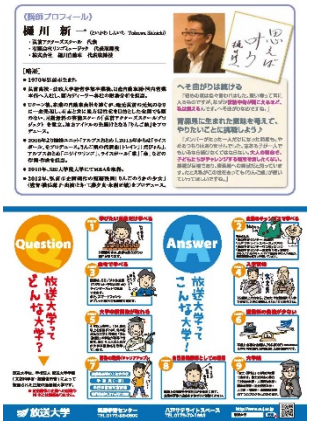
（２） 弘前大学ボランティアセンター

事業名称	令和元年度弘前大学ボランティアセンター市民ボランティア講座
主催	弘前大学ボランティアセンター
内容	近年頻発する大災害の中でも，台風による被害が昨年・今年と広範囲に及びました。 このような災害は，いつ・どの地域が被災するかわかりません。そこで，弘前市における豪雨災害時のハザードマップや対策について学び，有

	事の際に安全かつ迅速に正しい対応を行えるように下記のとおり講座を開催します。 　また，避難所設営のための資材の組み立てや防災食試食などの予備体験，災害対応のジレンマをカードゲームで学ぶ「クロスロード」や救急救命講習などのブースを設け，被災時のボランティア活動を学べる企画もあります。  講演会チラシ
日時	令和２年１月３１日（金）１８時００分～２０時３０分
会場	弘前大学大学会館３階　大集会室　（弘前市文京町）
実施状況等	○来場者数：４７名 講演会の様子    

（３） 放送大学青森学習センター

事業名称	放送大学青森学習センター公開講演会「地元のリーダーに学ぶ講演会」
主催	放送大学青森学習センター
内容	青森県発農業活性化アイドル『りんご娘』の生みの親が地方に住みながら夢をつかむ実行力や若者の夢を支援するための人づくりについて熱く語ります。   講演会チラシ
日時	令和元年１０月２６日（土）１３時３０分～１５時００分

会場	弘前大学コラボ弘大８階　八甲田ホール（青森県弘前市文京町）
実施状況等	○来場者数：３８名 講演会の様子    

（４）　弘前学院大学地域総合文化研究所

事業名称	弘前藩の古武術
主催	弘前学院大学地域総合文化研究所
内容	１．概要説明 本研究所客員研究員・北東北無形文化遺産実践研究協会　下田　雄次 ２．実　　演 弘前市無形文化財・卜傳流剣術　小山　隆秀 弘前藩伝・林崎新夢想流居合稽古会会長　外崎　源人 ３．座談会「武術の継承」

	 講演会チラシ
日時	令和元年１１月３０日（土）１４時００分～１６時００分
会場	弘前市民会館大会議室（弘前市大字下白銀町）
実施状況等	○参加者数　４０名 1　概要説明 弘前学院大学 地域総合文化研究所 客員研究員 北東北無形文化遺産実践研究会協会 下田 雄次さん  2　実演 ①弘前無形文化財・卜傳流剣術 小山 隆秀さん　②弘前藩伝・林崎新夢想流居合稽古会会長 外崎 源人さん  

	③実演の様子   3　座談会「武術の継承」 座談会の様子   

（５） 東北女子大学家政学部児童学科

事業名称	東北女子大学公開研究会 「『個』の尊重と学校教育２～不登校児童支援の現場から
主催	東北女子大学
内容	「個」の尊重と学校教育とは？ 東北女子大学児童学科が 2018 年度から開催している公開研究会。現代の学校教育，特に昨今改めて注目を集める「いじめや学校生活との不適応等に起因する不登校」の問題を，「『個』の尊重」を軸とした子どもの権利という観点から捉えなおし，学校を含めた社会全体において，いかにして子どもたちの「『個』の尊重」を図っていくかを考えるもの。

<table>
<tr><td></td><td> 

講演会チラシ</td></tr>
<tr><td>日時</td><td>令和元年７月２７日（土）１３時３０分～１６時００分</td></tr>
<tr><td>会場</td><td>土手町コミュニティパーク多目的ホールＡ（弘前市土手町）</td></tr>
<tr><td>実施状況等</td><td>〇来場者数：１２名
講演会の様子
 




 </td></tr>
</table>

（６） 弘前医療福祉大学短期大学部

事業名称	青森県産食材使った料理作品展
主催	弘前医療福祉大学短期大学部
内容	本学では学習成果発表の場として毎年，青森県産食材を使用した日本・西洋・中国料理のコースメニューを考案・制作して展示・公開しています。 県産食材を使用した料理を紹介することにより，県産食材の消費拡大につながることを願うとともに，「食」にかかわる様々な話題や情報を発信できればと考えております。  講演会チラシ
日時	令和２年２月２９日（土）１１時３０分～１５時００分
会場	土手町コミュニティパーク多目的ホールＡ（弘前市土手町 31 番地）
実施状況等	○来場者数：１１０名 会場の様子  








３．補助事業実施による成果

本コンソーシアム構成機関が，弘前市民の関心が文学，音楽，地域活性化をテーマにした公開講座を開催し，各大学が持つ知的シーズを提供した。これにより，高等教育・研究機関が有する学術機能を，地域社会に還元し，弘前市における教育・文化等の向上に寄与し，地域振興に貢献した。加えて，市民に「学都ひろさき」を印象づけ，市民による大学の活用を促すことが出来た。

【参考】同事業の要項

（１）補助対象事業

次に掲げる条件のいずれかを満たす事業を補助対象事業とする。なお，学園祭で市民向けの公開講座として開催する事業は，補助対象外とする。

① 広く一般市民を対象とするもの

② より市民の目に触れ，より市民が参加しやすい形態で行われるもの（街なかの施設等，大学外の会場で行うなど）

（２）補助金の交付額と補助対象経費

① 補助金の額は，原則，１大学あたり上限５０，０００円とする。

② 補助対象経費は，事業を実施するために必要な以下の経費とする。

・会場借上費
・チラシ・ポスター等印刷費（制作費）
・チラシ・ポスター等発送費
・事業実施に係る消耗品費
・外部講師謝金
・各号に掲げるもののほか，本コンソーシアム会長が必要と認めたもの

令和元年度活動報告

Ⅲ．学生交流事業

学生団体シンポジウム
～６大学 と 学生１万人 が弘前をつくる～

１．趣旨

近年，地域に関心を持ち，地域活性化や地域貢献，ＰＢＬ（Ｐｒｏｂｌｅｍ　Ｂａｓｅｄ　Ｌｅａｒｎｉｎｇ：問題解決型学習法）として，ゼミや研究室，課外活動で，地域に出て活動をする学生が増え，それぞれに一定の成果をあげている。

しかし，団体同士の繋がりは薄く，連携がとれないことや特定の地域のみの活動，学生の地域に根ざした活動を知らない市民が多いことが課題である。

そこで，学生の活動を広く公開することで，学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民が知ることのほか，大学の枠を越えた学生同士の交流の場をつくり，団体同士の繋がり強化，さらなる活発な活動を目指す。

２．概要

学生団体シンポジウム
～６大学 と 学生１万人 が 弘前をつくる～

○日時
令和元年１２月１日（日）
１３時００分～１６時３０分

○場所
土手町コミュニティパーク　多目的ホール

○プログラム
１３時００分　：　開会（挨拶等）
１３時０５分　：　オープニングパフォーマンス
津軽三味線演奏：東北女子大学邦楽部
１３時１５分　：　参加団体による 10 秒ＰＲ（１６団体）
１３時２０分　：　ポスター展示スタート
１４時３０分　：　オープンシアター
14：30　学生地域団体 Smoothie
14：40　青森中央学院大学 援農サークル en
14：50　食育研究グループ
15：00　農家農村サポートサークル TEAM DANBURI
15：10　弘前医療福祉大学救急救命研究会
15：20　学生団体@ぼくらし next
15：30　アカペラサークル V.E.L
15：40　弘前グローカル・アクション
／「弘前×フランス」プロジェクト
15：50　学生委員会いしてまい
１６時００分　：　エンディングパフォーマンス
アカペラサークル V.E.L
１６時１５分　：　閉会



シンポジウムポスター

○来場者数
　約１５０名（学生，市民，大学及び行政関係者等）
○共催
　弘前市
○協力
　ＮＰＯ法人ＳＥＥＤＳ　ＮＥＴＷＯＲＫ

３．参加学生団体



7 地域貢献室学生会
(弘前医療福祉大学)



地域貢献室では、学園祭での巨大アップルパイ（2枚）を販売、学内や近隣施設でのペットボトルキャップの回収など、地域交流や地域貢献活動を行っています。
今年度は弘前山と本学の連携協定を結びました。

8 弘前医療福祉大学救急救命研究会
(弘前医療福祉大学)

オープンシアター発表！



私たちはサークル活動の中で応急手当法を継続的に訓練し活用することで、マラソン大会の救護支援や防災訓練のスタッフ、心肺蘇生法の普及啓発などの地域貢献活動に取り組んでいます。当日は、これらの活動から得られる様々な学習成果を紹介します。

9 はこだて祭りネット
(キャンパス・コンソーシアム函館（函館市内8高等教育機関）)



お祭り（イベント）に参加されたことはありますか？きっと、多くの方がこの問いにYES!と答えるでしょう！お祭りが好きな方はきっと多いハズ・・・　私たちは、そんな皆さんが大好きであろう「祭」に着目し、道南地域を盛り上げる活動しています。

10 援農サークルen
(青森中央学院大学)

オープンシアター発表！



援農サークルenは青森中央学院大学のサークルです。私達は東北町でニンニクや長芋などの農作業を有償でサポートしてます。また、今年度は青森市内の耕休農地で千石の生産を始めました。10月には小学生と収穫祭を開催し、食農教育を推進しました。

11 青森学生団体ディペラボ
(青森大学・青森中央学院大学)



青森学生団体ディペラボは、学生たちが大学の垣根を越え、スキルアップと地域活性化を目指して活動する団体です。
「古森フード開発事業」というお店と提携して商品開発を行うプロジェクトをはじめとした様々な活動に取り組んでおります。

12 学生団体@ぼくらしnext
(弘前大学)

オープンシアター発表！

@ぼくらし next

「学生が一歩踏み出す機会の創出」を理念に活動する学生団体です。学生の成長や人生の選択肢を広げることを目的に、入学1、2年生を対象とした「早期インターンシップ」と、少人数限定イベント「弘前街ナカゼミ」の企画・運営をしています。

13 弘前街ナカゼミ　インターンシップメンバーズ
(NPO法人SEEDS NETWORK)



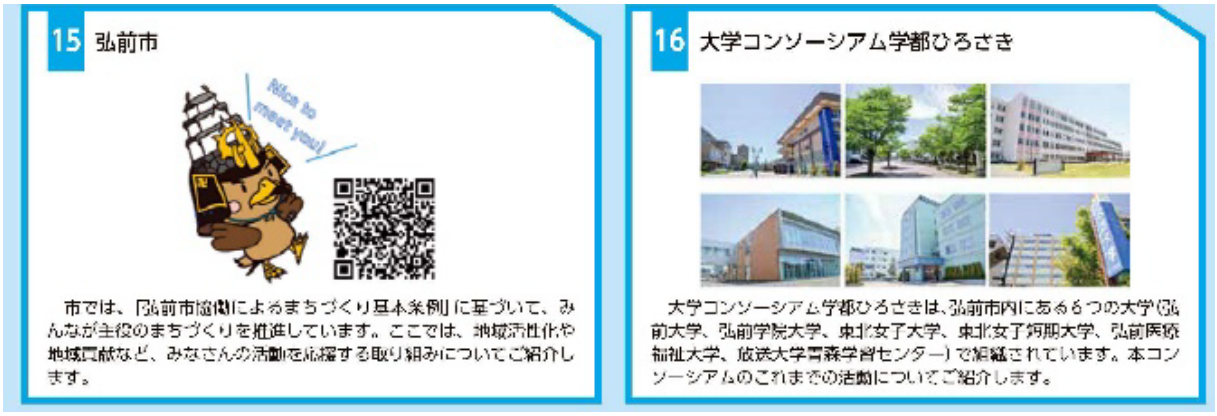
早期インターンシップのインターン生として、かっこいい大人をゲストに開催するトークイベント「弘前街ナカゼミ」の企画・運営をしました。2019年11月にお笑い芸人あどばるーんさんをゲストにお招きしました！経験し学んだことを、お伝えします！

14 学生委員会いしてまい
(大学コンソーシアム学都ひろさき)

オープンシアター発表！



学生委員会「いしてまい」では弘前市と連携し、大学生のゴミ排出量削減やリサイクル率向上に向けた意識啓発のために、10月に弘前学院大学と弘前大学の構内にて衣類回収BOXを設置しました。
今回はこの活動内容を紹介します。



４． 会場の様子

○学生団体シンポジウム開始



← オープニング・パフォーマンスを務めた
東北女子大学邦楽部



進行役：学生委員会いしてまい →



開会挨拶を務めた
弘前大学社会連携部社会連携課長

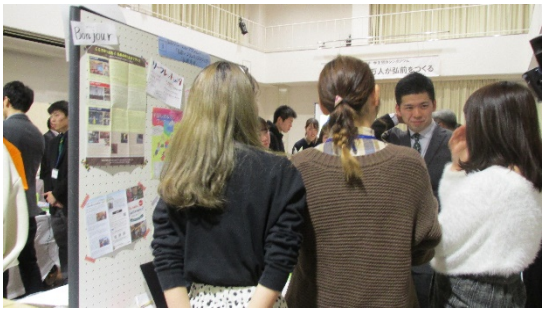


会場は学生と来場者で溢れていた

○ポスター展示ブースの様子

















○オープンシアタースタート





















○学生団体シンポジウムも終盤へ



← オープニング・パフォーマンスを務めた
アカペラサークルＶ．Ｅ．Ｌ



進行役：学生委員会いしてまい →





↑ 最後は参加学生や関係者で交流会 ↑

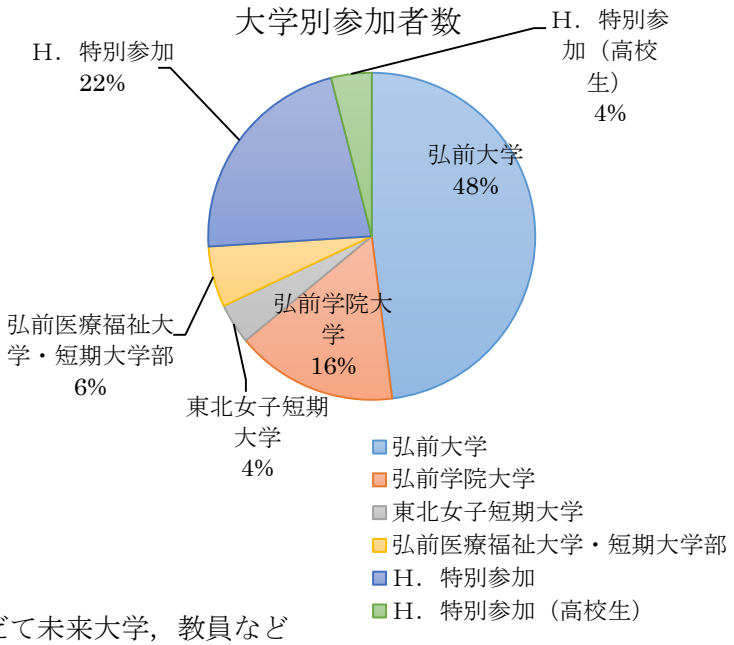
５．アンケート

○対象者　　：参加学生等	○回答者数：５０名
○参加学生等：６０名	○回答率　：８３．３３％

○回答者内訳

【所属別】

所属等	回答数（名）
A．弘前大学	２４
B．弘前学院大学	8
C．東北女子大学	0
D．東北女子短期大学	2
E．弘前医療福祉大学	0
F．弘前医療福祉大学短期大学部	3
G．放送大学	0
H．特別参加　※１	１１
H．特別参加　※２	2
計	５０



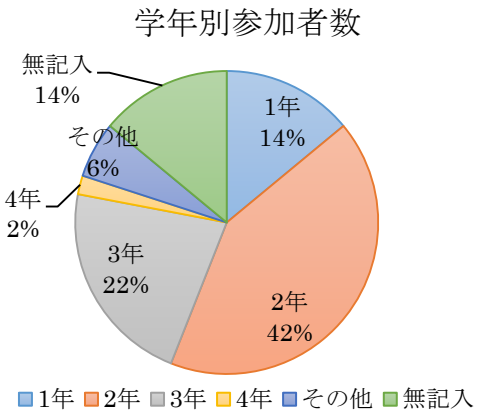
※１・・青森大学，青森中央学院大学，はこだて未来大学，教員など

※２・・聖愛高校

【学年別】

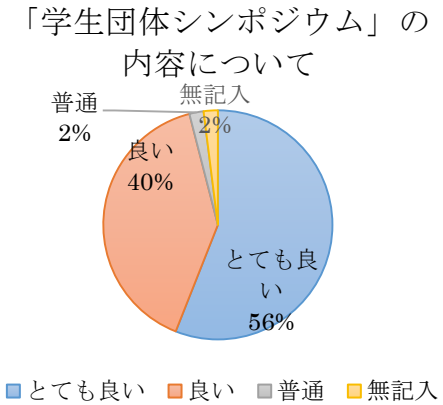
学年	回答数（名）
①　１年	7
②　２年	２１
③　３年	１１
④　４年	1
⑤　その他	3
⑥　無記入	7
計	５０

※その他…教員２名含む



○「学生団体シンポジウム」の内容についてどうだったか。

	回答数（名）
A．とても良い　※１	２８
B．良い　※２	２０
C．普通	1
D．悪い	0
E．とても悪い	0
無記入	1
計	５０



【※１】

A．とても良い

・大学生が地域のために取り組んでいることがわかりやすかったから。
・いろいろな体験を聞けて勉強になった。
・外の団体の活動を知れた。
・他の団体の活動を知り刺激になったし，自分の団体にも生かせる学びがあったから。
・普段同じ市内にいてもかかわる事のない学生と交流し，さらにその活動内容を知れるため。
・各大学の取り組みを話したり，聞くことで交流もできとても良いと思った。
・いろいろな人の発表を聞けた。
・様々な活動を知ることができた。
・他の団体の発表やブース見学を経て，これからの活動の刺激になった
・活発に活動している学生がこんなにいることを知れたから。
・他の団体がどんな活動をしているか知れる良い機会になった。
・自分の専門や所属団体の話ができて貴重でした。
・自分のブースとまた違ったことを知れた。
・知らなかった弘前の活動について知ることができたから。
・良い意味で緊張感がない雰囲気で伝えたいことをきちんと伝える環境であったから。

【※２】

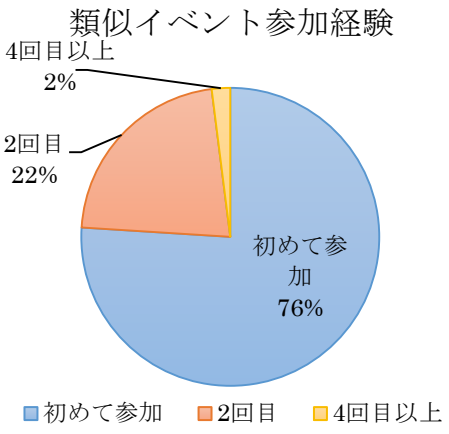
B．良い

・地域貢献のために様々な活動をしていて良いと思った。
・他大学と交流できたから。
・刺激を受けたから。
・青森市以外の大学の活動を知ることができたので良かったです。
・色々な団体の説明を聞けて良かったから。
・様々なサークルの取り組みや思いを聞くことができてよても勉強になったから。
・色々な団体の活動を見て刺激になった。
・ステージセッションとポスターセッションが混ざってステージで話す人の声が聞き取りにくかった。
・他のサークルとの具体的な内容に関する交流ができた。

○「学生団体シンポジウム」への参加について

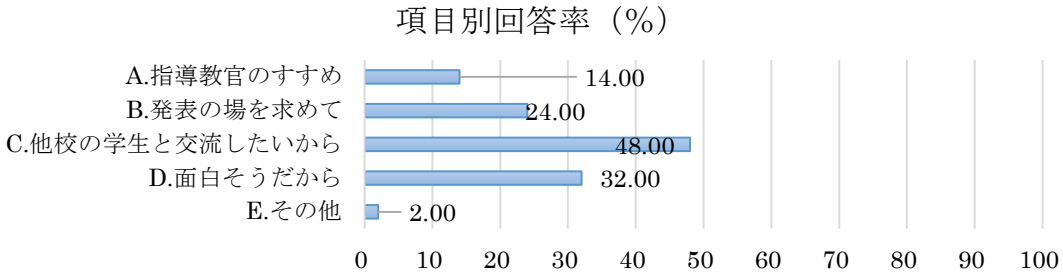
（１）類似イベント等への参加経験

	回答数（名）
A．初めて参加	３８
B．２回目	１１
C．３回目	０
D．４回目以上	１
計	５０



（２）「学生団体シンポジウム」に参加した理由（複数回答可）

	回答数（名）
A．指導教官のすすめ	７／５０名中
B．発表の場を求めて	１２／５０名中
C．他校の学生と交流したいから	２４／５０名中
D．面白そうだから	１６／５０名中
E．その他　※	１／５０名中

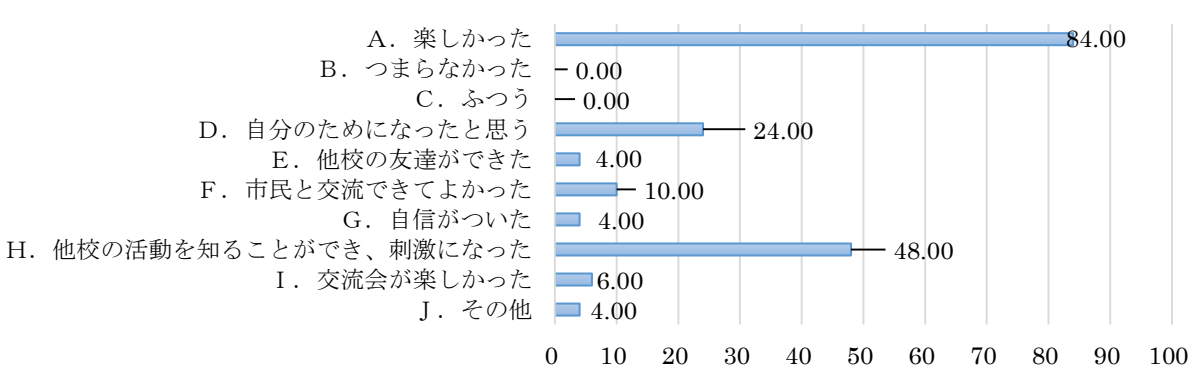


※E．その他

・取り組み状況を知りたかったから。
・団体に所属して，色々な体験をしてみたいと思ったから。
・昨年先輩が参加していたため，継続した。声掛けなど。
・大学コンソーシアム学都ひろさき事務局からのお誘い，去年同サークルの先輩がやってたから。

（３）「学生団体シンポジウム」に参加してどのような感想を持ったか。

	回答数（名）
A．楽しかった	４２／５０名中
B．つまらなかった	０／５０名中
C．ふつう	０／５０名中
D．自分のためになったと思う	１２／５０名中
E．他校の友達ができた	２／５０名中
F．市民と交流できてよかった	５／５０名中
G．自身がついた	２／５０名中
H．他校の活動を知ることができ，刺激になった	２４／５０名中
I．交流会が楽しかった	３／５０名中
J．その他　※	２／５０名中

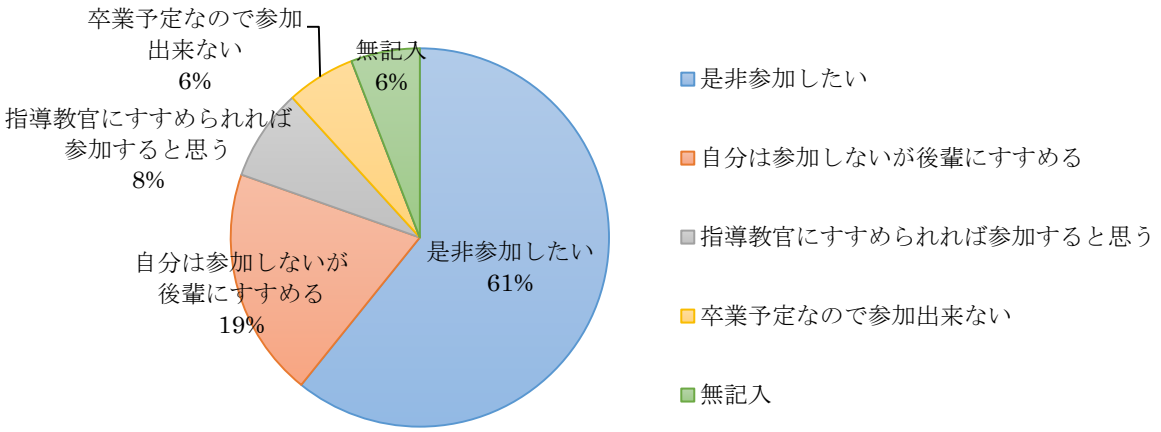


※　Ｊ．その他
・少し時間が長いのかな，と思いました。
・自身の活動を振り返るきかっかけになった。

（４）来年も「学生団体シンポジウム」に参加したいと思うか。（複数回答者あり）

	回答数（名）
Ａ．是非参加したい　※	３１
Ｂ．指導教員にすすめられれば参加すると思う	4
Ｃ．卒業予定なので参加出来ない	3
Ｄ．できれば参加したくない	0
Ｅ．自分は参加しないが後輩にすすめる	１０
無記入	3
計	５１

来年も「学生団体シンポジウム」に参加したいか

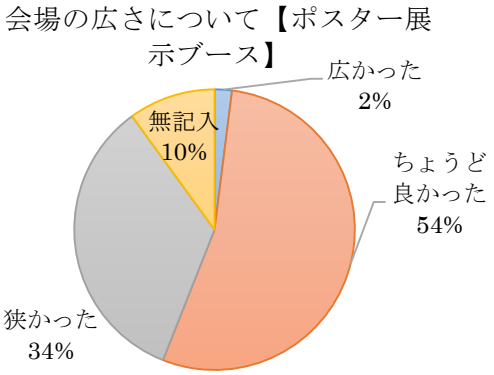


※　Ａ．是非参加したい
・自分の将来の役に立つと思うので参加したい。
・自分の将来の役に立つと思ったから。
・自分の団体の興味をもってもらえたから。
・〃他大学の学生と交流することにより，弘前市内のことをより知ることができる。発表することにより，プレゼン力などを養うことができ，自信につながる。〃
・今回あまり積極的になれなかったので，来年リベンジしたい。
・今回参加して色々勉強になったから。
・また刺激を受けたいと思ったから。
・一回で学びが得られたので次年度以降の話も見てみたいと思ったから。
・来年の活動報告を聞きたいと思ったから。
・事業代表者が変わるため
・プレゼンの精度を上げたいから。
・自分は試験があるため。
・来年度は最終学年になるため，参加できるかわからない。

○「学生団体シンポジウム」の会場・時間配分について

（1）ポスター展示ブースの広さはどうだったか。

	回答数（名）
A．広かった	1
B．ちょうど良かった	２７
C．狭かった　※	１７
D．その他	0
無記入	5
計	５０



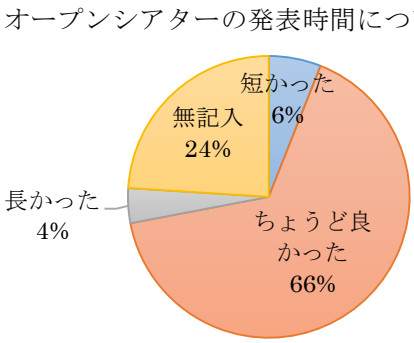
※　C．狭かった

・真ん中の歩くスペースがもう少し欲しかったです。

・2組くらいしか話しを聞く事が出来なかったため

（2）オープンシアターの時間はどうだったか。（オープンシアター参加者のみ）

	回答数（名）
A．短かった	3
B．ちょうど良かった　※	３３
C．長かった	2
D．　その他	0
無記入	１２
計	５０

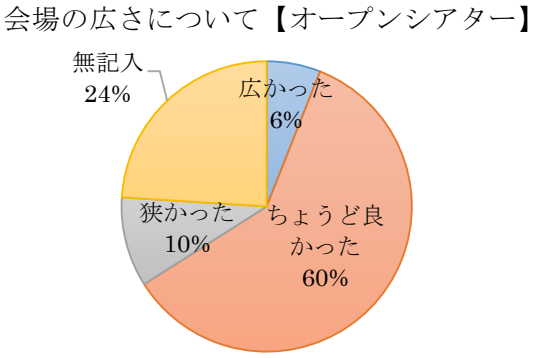


※　B．ちょうど良かった

・スライドの大きさが小さかった。

（3）オープンシアターのスペースはどうだったか

	回答数（名）
A．広かった	3
B．ちょうど良かった	３０
C．狭かった	5
D．その他	0
無記入	１２
計	５０



※　D．その他

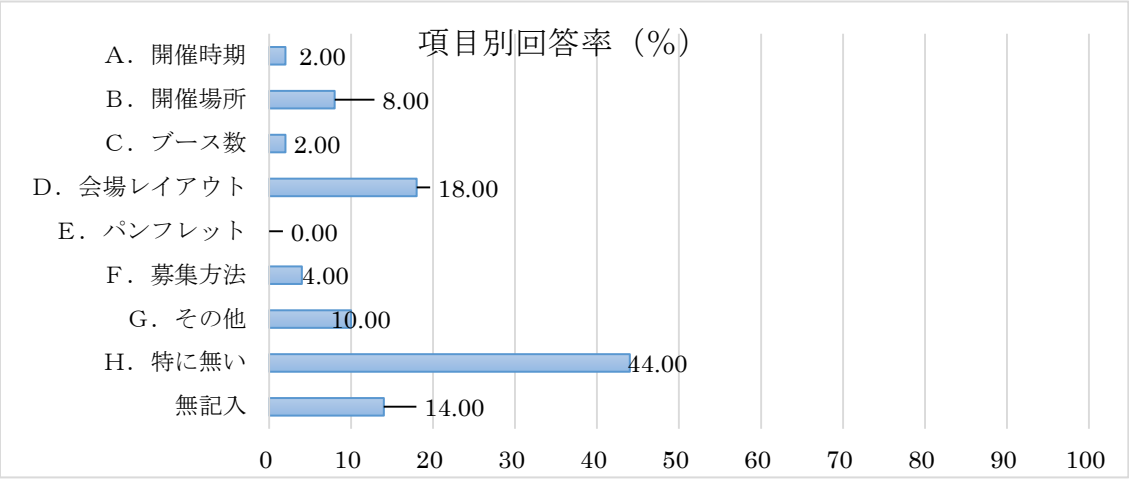
・オープンシアターの時間を１０分にしてほしい

・動員・市民参加

・時間（オープンシアター７分→５分とか）

○「改善すべき」と感じた点について（複数回答可）

	回答数（名）
A．開催時期	１／５０名中
B．開催場所	４／５０名中
C．ブース数	１／５０名中
D．会場レイアウト	９／５０名中
E．パンフレット	０／５０名中
F．募集方法	２／５０名中
G．その他	５／５０名中
H．特に無い	２２／５０名中
無記入	７／５０名中



○意見

・一般市民の方々や高校生が会場に入るにはちょっと厳しい。（入りにくい）このイベントを知らない人も多いと思うので，街頭で呼び込みをするのもありだと思います。
・駐車場などある建物だと来場しやすい。
・もう少し展示ブースを広くしてほしい。オープンシアターを少し狭くして。
・狭くてとおりすがるのが大変だった。
・会場が狭く，椅子が少ないと思った。
・ブースのお話を聞くのに狭かったです。
・活動はすばらしい。自分の活動が今後どのようになっていくのか見えると他学生もどんどん興味をもつと思われます。
・大学でテストの期間（11 月末～12 月頭）なので，発表ポスターやスライドが十分に準備できなかった。募集の開始がわからなかったので，LINE などでアナウンスしてもらえるとありがたいです。
・ポスター展示場所とオープンシアターの距離が短く，オープンシアターでの発表の時に展示場所での話声が聞こえていたので，仕切りをつけたり，何かの工夫をしたらどうかと思った。
・オープンシアターはまじめな話も多く，インプットの多い場なので，集中しやすいように休憩など入れた方がいいと思った。
・オープンシアターの時，周りがざわざわしてて発表があまり聞こえなかったので改善すべきだ

と思いました。
・オープンシアターの際は展示ブースを一旦休止にするか，オープンシアターを展示ブース開始よりも前に行うべきかなと思いました。発表の準備に見合った，皆さんの反応や活動への理解が求められると感じました。
・ステージ発表とポスター発表のブースが近すぎて，ステージ発表がきこえづらい時があったこと。
・オープンシアターとポスターとの差別化か，オープンシアターの時は，ポスターセッションを止めるなどの工夫が必要だと思いました。
・オープンシアターとポスターセッションを別々にするべきだと感じた。
・オープンシアターとポスターセッションを同時に行うと，かなりざわつく。オープンシアターに影響が出てしまう。

○感想等
【シンポジウム感想等】
・普段見れない様々な大学の発表を見れてよかった。
・学生のみなさんはよくがんばっていると思います。
・たくさんの方と交流ができて良かったです。ありがとうございました。
・初めての参加でしたが，とても楽しく勉強になりました。
・他大学の学生を交流することが出来て良かった。来年は卒業するので参加できないが，後輩にぜひ進めたいと思う。
・楽しかったです。ありがとうございました。
・他大学の人と交流することで，良い取り組みができました。提案をしたりなどもでき，もっと広めていきたいと思いました。
・楽しかった。
・オープニングパフォーマンスとエンディングパフォーマンスがあったのが良かったと思います。
・オープンシアターは，司会みたいな人がいた方が良かったのではないかなと感じました。
勉強になったと思う。
・他の団体や市民の方々との交流で，刺激をもらえ，今後の活動に生かそうと思えました。
・弘前に住んでいながら，他大学の人たちと関わる機会は今までなかったので，本当に貴重な体験となりました。ありがとうございました。
・色々な団体の話を聞けて，良い刺激になりました。
・自分たちの活動を知ってもらうだけでなく，他団体の活動を知ることができたり，お話をすることが出来て，とても楽しかったでし，刺激になった。とても楽しかったです。
・ご招待いただきありがとうございました。後輩たちにとって良い刺激を受け取ることができた一日になったようです。
・自分たちの活動報告の場としてもそうですが，他大学の意識の高い活動の様子を見ることができ，いい刺激になりました。
・良い経験ができた。
・良い経験だった。
・楽しかったです。またの機会がございましたら，お声がけいただけると幸いです。(ディベラボ)
頑張って下さい！

・他校の方と社会人の方とお話できたのが良かったです。
・他大学の多様な活動を知れてとても良い機会だった。
・自分のしている，頑張っていることと同じようなことをしている団体を見れてやる気がでた。
・もっと頑張らなきゃと思った。函館の団体もいて交流できて楽しい。
・自分たちの活動・想いを振り返る良い機会になった。
・初めてこのような発表の場に参加したことによって，就職した後の場で役に立つと感じた。
・他サークルとの交流の場というものは今まで経験がなかったため，非常に良い場だと思った。刺激になった。

６．新聞掲載記事



弘前市内を中心とした学生団体が取り組みを紹介したシンポジウム

学生団体の活動紹介

学都ひろさきシンポ 展示やプレゼンも

弘前大学など弘前市内の6大学で組織する「大学コンソーシアム学都ひろさき」は1日、地域で活動する学生団体の取り組みを紹介するシンポジウム「6大学と学生1万人が弘前をつくる」を同市の土手町コミュニティパークで開いた。16団体が参加し、実績報告や学生同士の交流を通じて活動の周知と理解に努めた。

シンポジウムにはコンソーシアムの構成大学のほか、青森市内の2大学による団体や函館市内の8高等教育機関で組織する「キャンパス・コンソーシアム函館」の「はこだて祭りネット」なども参加。ポスター展示で各団体の活動や成果を紹介した。

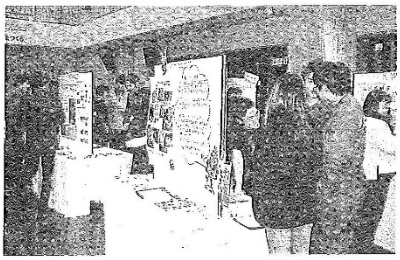
参加のうち9団体は取り組みの詳細をプレゼンテーション形式で発表。弘大の「農家農EAM DANBURI」では、人手不足の農家と農作業体験に興味のある学生をつなげ、学生が農業を手伝う「援農」の取り組みを紹介。メンバーは農学生命科学部の学生が中心だが、今後は他学部、他大学にも裾野を広げたいとした。（福田藍圭）

陸奥新報社提供

令和元年１２月３日（火）１７面



サークルの活動発表をする学生



ポスター展示でサークルなどの活動を紹介する学生

大学コンソーシアムがシンポ

学生団体の活動知って

大学コンソーシアム学都ひろさきは1日、学生団体シンポジウム「6大学と学生1万人が弘前をつくる」を同市土手町の土手町コミュニティパークで開いた。弘前大学などの学生団体や研究室、サークルなどがポスター展示や発表を通じて活動を紹介するとともに、大学の枠を超えて交流を深めた。

シンポは、地域で活動する学生が増え一定の成果を上げている一方、団体同士の連携が取れていないことや、学生の活動を知らない市民が多いことから、現状を多くの市民に知ってもらい、団体同士のつながり強化、さらなる活発な活動を目指すことが目的。市内の4大学や青森中央学院大学などの16団体が参加した。

9団体が活動発表に参加。弘前医療福祉大学救急救命研究会はマラソン大会での救護支援の状況を報告した。学生は「活動を通じて、相互連携の重要性を学び、授業に応用するようになった」などと成果を話した。

また、学生委員会「いしてまい」は、弘前市と連携し、ゴミ減量化・資源化の取り組みの一環として弘前学院大と弘前大学に期間限定で衣類回収ボックスを設置したことを紹介。学生は「『どうせゴミは減らない』などと考えている人たちの意識を変えていくことが今後の課題」と語った。（宮川学）

東奥日報社提供

令和元年１２月１０日（火）１５面

７．事業成果

昨年度に引き続き，弘前市の中心市街地で多くの大学生が集まってイベントを開催し，賑わいを創出することができた。当日は，本コンソーシアムと日頃から交流のある北海道函館市のキャンパス・コンソーシアム函館の学生団体に加え，今回初めて青森市産官学連携プラットフォームの学生団体が参加し，他の大学コンソーシアム組織の学生との交流が深まった。

会場は，約１５０名の市民，学生，関係者で大いに賑わい，普段関わることが無い異なる大学の学生が意見交換を行うことで，大学間交流に加え，互いの活動情報を共有することもでき，参加者の満足度の高いイベントになった。

８．反省点・改善点

○今回は参加大学数が増えたのが収穫だったが，高校生の来場者が想定より少なかったため，次年度は高校へ呼び込みについて検討したい。

○一つの会場内にポスター展示ブースとオープンセミナースペースを設置したことにより，会場内の賑わいを創出することが出来た半面，お互いの音で説明がよく聞こえない場面がみられたため，音量に注意しつつバランスをとっていく必要がある。

○昨年度よりは改善出来たが会場が狭いという意見が少しみられたため，会場レイアウトの工夫をしていきたい。

弘前市長と加盟大学学生との懇談会

１．弘前市長と加盟大学学生との懇談会とは

現在の大学生の実態と弘前市が求める学生力について，櫻田　宏　弘前市長と意見交換をし，弘前市のために大学生ができること，大学生のために弘前市ができることについて考える契機とし，学生による地域づくりの促進と弘前市の更なる発展に寄与することを目的とする。

２．概要

○テーマ

私たち「いしてまい」は弘前市と連携し弘前大学と弘前学院大学に衣類回収ボックスを設置した。予想以上に衣類を回収することができ，また，これによってゴミやリサイクルに対する周囲の意識が変わったこともアンケート調査から見えてきた。このような活動を報告するとともに，今後さらに盛り上げるために「学都ひろさき」を学びと活動の拠点としている私たちいしてまいが考えるまちづくりと，市長が考える目指すべき弘前について意見交換を行う。

○日時

令和年２月１０日（月）１３時３０分～１４時３０分

○会場

弘前市役所新館２階　市長室

○参加者

７名

・弘前学院大学	金ヶ崎　七虹（２年）
	中野友裕（２年）
	佐藤大智（１年）
	原田祐貴（１年）
	畑中幸輔（１年）
・弘前大学	佐藤一輝（１年）
	福田公博（１年）

３．懇談内容

○市長からご挨拶

若い方々からの視点と，市役所の視点が融合することで，地域の課題の解決に繋がる機会となる。これからの街は誰が作っていくのかを投げかけ，市民，学生，こども，事業者，市役所など７つの事業主体がこれからの街を作っていくことで，連携した街づくりが出来る。

今日がその実践のための大きなステップになる。それぞれができることに一歩踏み込んでいく，取り組んでいく機会になれば良い。何かしら生まれ，個人個人に芽生えることを期待している。

○衣類回収ボックス設置及び各種展示会の取組説明

（学生）　いしてまいとは，「大学コンソーシアム学都ひろさき」に加盟する市内６大学の学生団体である。弘前市との連携としては，弘前市役所と連携し，共に地域課題について

考え，実際に行動に移す活動を今年度から始めた。これは学生委員会「いしてまい」だからこそできる体験である。普段の活動は月に２～３回程度，放課後の時間帯に集まっていて，他大学との交流も深めている。

次に，衣類回収ボックス設置活動について，活動の動機は弘前市の１日１人あたりのごみ排出量の多さ，リサイクル率の低さが喫緊の課題であったため。活動内容（実施期間及び設置場所）は，①弘前学院大学で 10 月 1 日～10 月 9 日まで，②弘前大学で 10 月 10 日～10 月 18 日まで実施。設置場所は①弘前学院大学ラウンジ前，②弘前大学学資絵会館前に設置された。結果について，２大学で集まった衣類は重さにして約 250 キロ。（りんご約 1000 個分）であった。

アンケート結果などに基づき，まとめとして，リサイクルに関心がない人の意識を変えていくことが，今後のいしてまいの課題である。

（市長）　いしてまいがレベルアップをしている。変わっていくメンバーの中で，新たなことに取り組んでいくことに加えて，振り返りから今何ができるのかに繋げるという，その姿勢に期待している。さらに，６つの大学以外にも広い視野に浸透していければ良い。

衣類回収ボックスについては，関心がない人たちに何か伝えることが出来れば，やる気が出て，１人１人が行動に移してくれる時が来るのではないか。市民には力がある。関心のない人たちも協力してくれることが大事である。学生の統計データも大切である為，ぜひ定期的に行ってほしい。

例として，家庭のごみ問題（生ごみ，重さを減らすなど）も，市民に協力していただくことがごみの減量化，地球環境問題にも繋がっており，身近なことが結果として繋がっていく。市民の力はすごい。

○つながるマップ（飲食店マップ）のアップデート

（学生）　「つながるマップ（飲食店マップ）のアップデートについて」について意見交換をさせていただきたいと思う。先代のいしてまいメンバーが作成した「つながるマップ vol．１・vol．２」についてアップデートを検討している。現メンバーとしては，飲食店の稼働状況を更新するとともに，例えば「弘前さくらまつり」や「弘前ねぷたまつり」に加え，その他大学生でも楽しめるイベント情報を追加し掲載したいと考えている。

（市長）　観光客も地域住民もともに共感，共鳴できる感動と交流の新しい旅のスタイルの展開として，弘前感交劇場（観光，感動）が設立。魅力はイベントだけではなく日常の生活文化にある。

また，市役所の作成したマップになくて，学生のマップにはあったものがある。それは，駐輪場が記載されていたこと。その視点が市役所側になかったことを踏まえて，学生の目線というものも大切であると感じた。つながるマップについてもぜひいろんなところを回って学生目線で作成してほしい。

（学生）　市民の作りあげた弘前を市長は愛していらっしゃると感じた。市長からのアドバイスを基に，学生目線のマップを作っていきたい。

また，弘前の魅力を感じている。この魅力を伝えることに加えて，地元にいるから

気づかないこともあると思うので，そういった方々にも広めていけたらと思う。

（市長）　弘前（地域）で生まれ育った人が土だとすると，他県から移り住んで来た方は風の人である。地域と他県が組み合わさり，風土となる。それが文化となり次の世代に受け継がれていく。新しい風が入るほど地域の土の部分が掘り起こされていき，また何かが生まれる。そのようにつくられていくものである。

○市長が目指すべき弘前

（市長）　「こどもたちの笑い声とそれをとりまく大人たちの優しいまなざしの中でこの街に生まれて，この町に暮らしていてよかったと思える街にしていきたい」というイメージ。そのための手段がいっぱいある。そんな地域作りを繋げていきたい。










４．新聞記事

まちづくり 市民参加策探る

学生と市長が意見交換

弘前

弘前市の学生団体「いしてまい」のメンバー7人が10日、弘前市役所で桜田宏市長と意見交換する「学生と市長の放課後ミーティング」を行った。まちづくりへの市民の参加を促す方策などについて、さっくばらんに語り合った。

いしてまいは弘前市内6大学でつくる「大学コンソーシアム学都ひろさき」の学生委員会。市長とのミーティングでは同委員会代表の金ケ崎七虹（なな）さん（弘前学院大学2年）が、昨年10月に弘前学院大と弘前大学に衣類回収ボックスを置いたところ、約250㌔が集まったことを報告。「ごみ減量やリサイクルに対する学生の意識を変えることが、いしてまいの今後の課題」と語った。

桜田市長は「市内の家庭系ごみの排出量は年々減っている。市民が身近なところから取り組んでいる成果で、ごみ減量はまさに市民運動だ」と強調した。

このほか学生たちは、市内の食堂やカフェ、居酒屋などを紹介する冊子の作成を予定していることに触れ、「メンバーの出身地はばらばら。ずっと弘前で暮らしていないからこそ気付く地域の良さを広めたい」と市長に語った。

福島県いわき市出身の佐藤一輝さん（弘前大学1年）は、「全国チェーンではない、地域密着型の個性的なお店が多いのが弘前の特徴だと思う。そこを生かす活動ができたら」と意欲を新たにしていた。（古川靖隆）



和やかな雰囲気の中、桜田市長㊧と意見交換する学生団体「いしてまい」のメンバー

市民生活の課題は

弘前市内の大学生7人 市長と意見交換

弘前市内の大学生と桜田宏市長が語り合う「学生と市長の放課後ミーティング」が10日、市役所で開かれた。学生7人と桜田市長が市民生活の課題やまちづくりをめぐって意見を交わした。

ミーティングは市民の声に応えられる、開かれた市役所づくりなどを目的に毎年開かれており、今回は市内の6大学が連携する大学コンソーシアム学都ひろさきの学生委員会などを紹介。

これに対して桜田市長は、市民に協力を呼び掛けながらごみ減量に向けた各種施策を展開し、市のごみ排出量が減少傾向にあることなどを説明した。

さらに、いしてまいのメンバーが、自ら作成した飲食店マップの内容をさらに充実させるためにアドバイスを求めた。桜田市長は市内に老舗食堂が残っていることに触れ、「地域の魅力は日常の生活文化にある」と語った。

「いしてまい」代表の金ケ崎七虹さん（弘前学院大学2年）は「弘前の学生に対して何ができるか、市長の話を参考に考えたい」と述べた。（長内忠光）



まちづくりなどをめぐって意見を交わす桜田市長（右端）と学生たち

↑東奥日報社提供（上）

（令和２年２月１３日（木）１９面）

←陸奥新報社提供（左）

（令和２年２月１１日（火）５面）

５．反省点及び改善点

本年度の市長ミーティング開催時期について，他大学の学生で構成される学生委員会いしてまいである為，スケジュールの調整が難しい時期でもあった。

次年度は，学生が準備を進めやすい時期にミーティング出来るよう調整が必要である。

６．事業成果

参加した学生は, 初めて体験する市長室でのミーティングということもあり, 緊張していたが, 和やかな対談の中で自然に笑顔になり，市長のアドバイスに耳を傾けていた。話す内容や配分など準備はしていたが，会話を楽しむとともに，市長への質問などもたくさんあり，限られた時間の中で，内容を短縮しながら臨機応変にミーティングを進めていた。

学生達にとっては，人生で中々経験することの出来ない市長室でのミーティングを経験することにより，今後の進路や人生観にプラスとなる，大変有意義な機会となった。

ひろさき移動キャンパス

１．ひろさき移動キャンパスとは

本コンソーシアムを構成する６大学が共同で「学園都市ひろさき」の魅力を県外にアピールすることにより，弘前で学びたいという学生の増加を目指し，また，他地域コンソーシアムとの交流を深め，本コンソーシアムの充実を図ることを目的として，北海道函館市の「キャンパス・コンソーシアム函館」が主催する「ＨＡＫＯＤＡＴＥアカデミックリンク」に，本コンソーシアムの学生委員会である「いしてまい」がブース出展をする。

２．概要

○日時

令和元年１１月９日（土）１２時００分～１６時００分

○会場

北海道教育大学函館校（函館市八幡町 1-2）

○参加メンバー（学生委員会「いしてまい」から６名）

弘前学院大学　今井　修大（１年）
原田　祐貴（１年）
佐藤　大智（１年）
畑中　幸輔（１年）

弘前大学　佐藤　一輝（１年）
福田　公博（１年）



３．発表内容

○参加形態

ブース出展

○発表内容

弘前市は１日１人あたりのごみ排出量の多さ，リサイクル率の低さが喫緊の課題です。弘前市役所ではその現状を変えるために「３キリ運動」などの様々な活動をしており，中でも私達が着目したのは「衣類回収ボックス」です。

学生委員会「いしてまい」は弘前市役所と連携して，弘前学院大学及び弘前大学に衣類回収ＢＯＸを設置しチラシ配り等を行うことにより，リサイクルの促進とごみ排出量の削減に向けた啓発活動を行いました。当日はこれをポスター形式で発表します。

○訪問者数

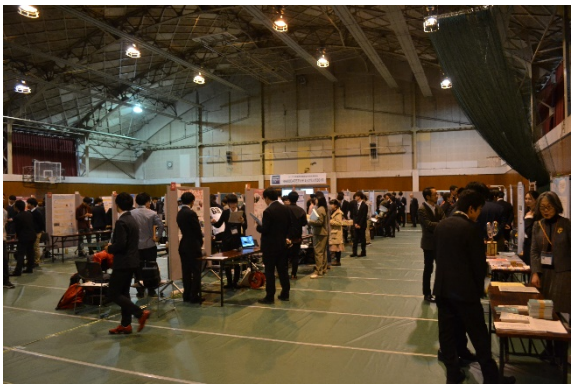
約３０名（参加団体の学生，高校生，一般等）

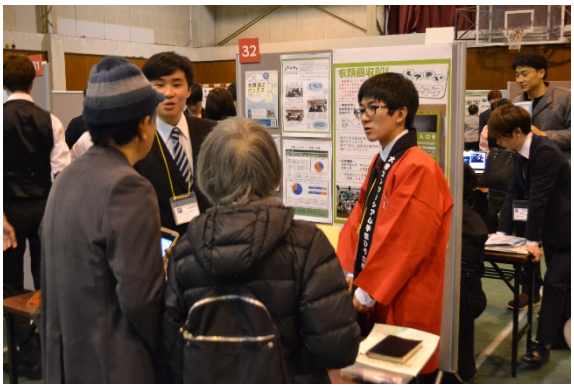
○訪問者からのアドバイス

・４月の新入生歓迎会の際に市役所の環境課の方に来ていただき弘前のゴミに関するレクチャーをしていただいたらもっと学生のゴミ問題に対する意識が高まるのではないか。などのアドバイスをいただいた。

４．会場の様子等













５．参加による成果・効果（学生委員会からの報告）

いしてまいが 10 月 1 日～18 日に弘前学院大学及び弘前大学で行った衣類回収ＢＯＸ設置に関する活動内容をポスター発表形式で行うとともに，令和元年１２月１日に弘前市で行う学生団体シンポジウムに招待する函館コンソーシアムのはこだてお祭りネットと事前交流を行うことができた。また，函館市内の学生団体との交流＆発表内容の聴講を行い，いしてまいの今後の活動内容の参考にできるものが多数あったことやモチベーションアップに繋がった。

６．今後の活動に向けて

他団体の発表を見て，先代のいしてまいが作成していた『つながる MAP』についてアップデートをしていく必要があると感じた。また，訪問者からのアドバイスを参考に，４月の新入生歓迎会の際に，いしてまいが実施した「衣類回収ボックス」の活動を紹介し，リサイクル促進とゴミ排出量削減の意識啓発を行いたい。

学生委員会「いしてまい」活動

１．衣類回収ボックス設置事業

（１）目的

弘前市の平成 29 年度の 1 人 1 日あたりのごみ排出量は，都道府県別で全国ワースト 5 位，県内ではワースト 3 位である。また，リサイクル率は全国ワースト 7 位，県内ワースト 7 位と，弘前市の喫緊の課題である。多くのごみを捨てることは，環境の負荷や費用の負担にもつながり，ごみの排出量を抑えることで，環境への負荷や費用の負担を抑えることができる。そこで，私たちいしてまいは，この課題を解決したいと考え検討を重ねた結果，ごみ排出量の減量とリサイクルが両立できる「衣類回収ボックス」を弘前学院大学及び弘前大学構内に設置し，ごみ問題への意識啓発に取り組みたいと考えた。衣類回収ボックスで回収された衣類は，再資源化業者により再利用できるものと，それ以外に選別され，再利用できるものは主に東南アジアで古着として流通し，それ以外のものは工業用ウエス(雑巾)として再利用されることから，意外と重い衣類を，捨てずにリサイクルすることは，私たちができる持続可能な環境づくりへの一歩であると考えられる。

（２）実施スケジュール

09 月 25 日（水）　弘前学院大学でチラシ配り開始（学生＆教職員）
09 月 30 日（月）　弘前学院大学へリサイクルボックス設置（弘前市環境課）
10 月 01 日（火）　弘前学院大学での活動開始（昼休み）
10 月 07 日（月）　弘前大学でチラシ配り開始（学生＆教職員）
10 月 09 日（水）　弘前学院大学での活動終了（昼休み）
10 月 09 日（水）　弘前大学へリサイクルボックス設置（弘前市環境課：18 時頃）
10 月 10 日（木）　弘前大学での活動開始（昼休み）
10 月 18 日（水）　弘前大学での活動終了（昼休み）
10 月 31 日（木）　活動内容のポスター作成完了
11 月 09 日（土）　函館アカデミックリンク（函館）で活動内容をポスター発表
12 月 01 日（土）　学生団体シンポジウム（弘前）で活動内容をスライド発表及びポスター発表
01 月 11 日（土）　第２回 AOMORI SIX 合同学修・研究発表会で活動内容をポスター発表

（３）回収した衣類の活用

使用できる製品は東南アジアにて古着としてリユースされ，使用できない衣類は工業用のウエス(雑巾)としてリユースされる。

（４）衣類回収ボックス設置事業のチラシ





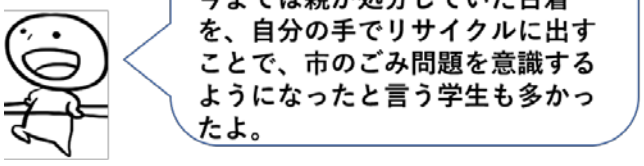
（５）衣類回収結果

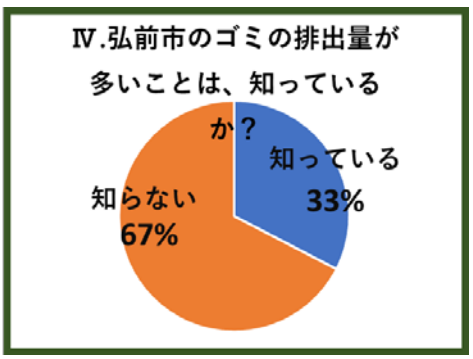


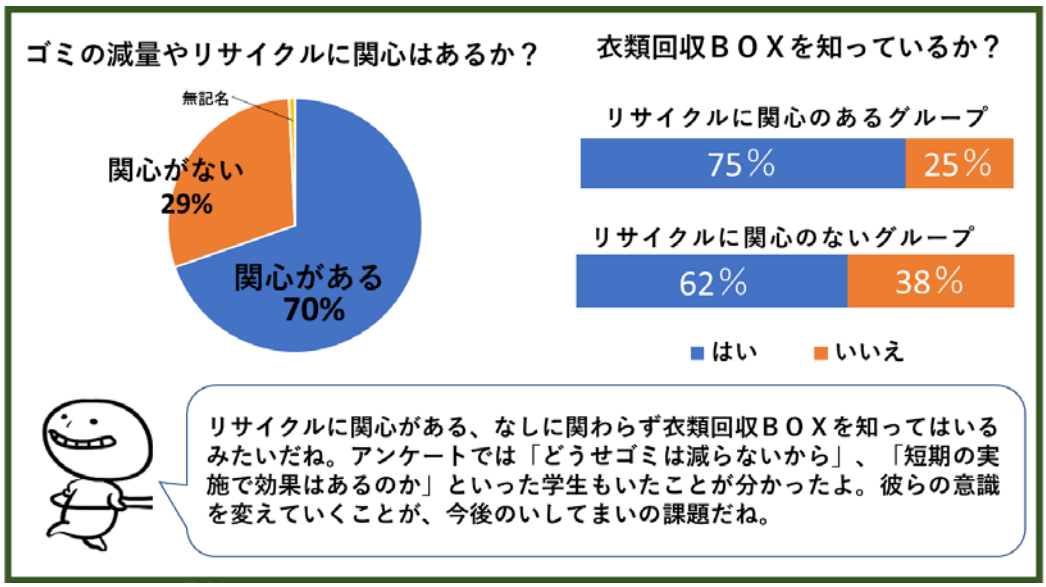
結果

２大学で集まった衣類は約250キロ。
りんご約1000個分！
この衣類回収BOXに不要な衣類を出すことによって、弘前市のごみの排出量を抑えることができます。
今回の取り組みを、弘前市全体のゴミ排出量の削減とリサイクルの促進へのきっかけにしたいと思っています。

（６）アンケート結果







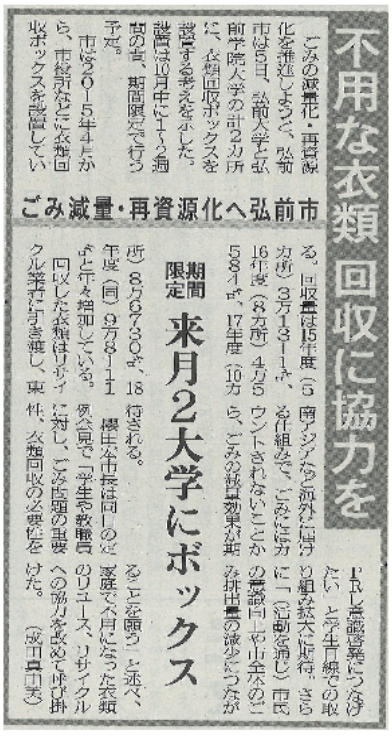
（７）全体を通して

アンケートの結果から，上記の課題が浮き彫りになった。しかし，衣類回収ＢＯＸの役割を理解し，地元地域に貢献しているということを意識して見られるようになった人がいると分かったので，少なくとも効果はあったのだと考えられる。

新聞やラジオを含めマスコミを通じた宣伝もあり，市民や市役所職員からの反響もあった。市民が地域に対し課題意識を持ち行動するきっかけづくりの第一歩となったと感じている。

（８）新聞記事

令和元年９月６日（金）付け陸奥新報第２面



不用な衣類回収に協力を

ごみ減量・再資源化へ弘前市

期間限定 来月2大学にボックス

陸奥新報社提供
（左、右）

令和元年10月2日付け陸奥新報第2面

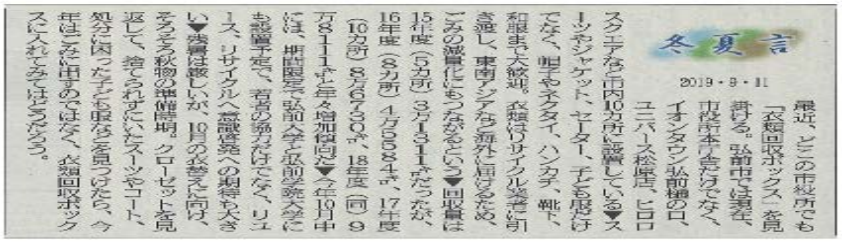


衣類の再資源化を

弘前6大学連携学生委員会

弘学大に回収箱設置

令和元年９月11日付け陸奥新報第１面「冬夏言」



冬夏言

2019・9・11

最近、どこの市役所でも「衣類回収ボックス」を見掛ける。弘前市では東京、市役所本庁舎だけでなく、イオンタウン弘前樋の口、ユニバース松原店、ヒロロスクエアなど市内10カ所に設置している▼スーツやジャケット、セーター、子ども服だけでなく、靴下やネクタイ、ハンカチ、靴、和服まで大歓迎。衣類はリサイクル業者に引き渡し、東南アジアなど海外に届けるため、ごみの減量化にもつながるという▼回収量は15年度（５カ所）３万1311キロだったが、16年度（８カ所）４万5984キロ、17年度（10カ所）８万6730キロ、18年度（同）９万8111キロと年々増加傾向だ▼今年10月には、期間限定で弘前大学と弘前学院大学にお設置予定で、若者の協力だけでなく、リユース、リサイクル（資源化）への期待も大きい▼設置は嬉しいが、10月の衣替えに向け、そろそろ秋物の準備時期。クローゼットを見返して、捨てられずにいたスーツをコート、処分に困った子ども服などを見つけたら、今年はごみに出すのではなく、衣類回収ボックスに入れてみてはどうだろう。

陸奥新報社提供

令和元年10月31日付け東奥日報第17面



市のごみ減量化・資源化

市民運動 じわり拡大

弘前

交差点

衣類回収ボックス

「一人一人できることを」

「3010運動」ポップ

令和元年12月1日　広報ひろさき12月1日号



学生委員会コーナー

もっともっと♡弘前！

ひろレポ

今月のテーマ♥ 弘前で活動している学生委員会「いしてまい」を紹介します！

学生委員会「いしてまい」ってナニ？

弘前市と連携して衣類回収ボックスを設置しました

～「いしてまい」からのメッセージ～

メンバー募集中！！

15

東奥日報社提供

２．AOMORI SIX 合同学修・研究発表会

（１）概要

・開催日時：２０２０年１月１１日（土）　１０時～１６時３０分（一般公開時間）

・会　　場：東奥日報新町ビル New’ｓホール

・公開対象：中学生・高校生・一般市民ほか

・入 場 料：無料

・内　　容：青森市内６大学・短期大学の学生，青森県内高校生等による学修・研究発表
　　その他関連団体による発表

・参 加 者：弘前学院大学　金ケ崎七虹（２年），佐藤大智（１年）
　　弘前大学　　佐藤一輝（１年），福田公博（１年）
・主　　催：青森市産官学連携プラットフォーム

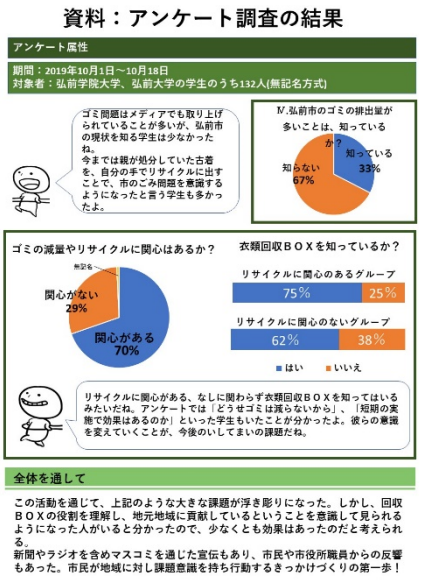
（２）発表内容

弘前市では１日１人あたりのごみ排出量の多さ，またリサイクル率の低さが喫緊の課題であり，弘前市役所ではその現状を変えるために「３キリ運動」などの様々な活動をしている。

その中で，今年度実施した「衣類回収ボックス設置事業」は，私たち大学生が協力できる「持続可能なまちづくり」の推進に繋がるツールとして捉え，活動してきたことをポスター展示により発表した。

展示したポスター





（３）発表を通して

聴講者から「素晴らしい活動なので今後の発展に期待したい」等のコメントをいただくとともに，後日，主催者からアンケート形式の投票の結果「奨励賞」を受賞した。

また，会場内の他の学生団体の発表を見て回り，改めて，先代のいしてまいが作成していた『つながる MAP』についてアップデートをしていく必要があると感じた。

大学コンソーシアム学都ひろさき

令 和 元 年 度 活 動 報 告 集

発　　行　令和２年３月３１日
編　　集　大学コンソーシアム学都ひろさき
印　　刷　やまと印刷株式会社
　　弘前市神田４丁目４―５
　　ＴＥＬ　０１７２－３４－４１１１

構　成　機　関



弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1
[TEL] 0172-36-2111（代表）
[ホームページURL]
https://www.hirosaki-u.ac.jp/



弘前学院大学

〒036-8577 青森県弘前市稔町13-1
[TEL] 0172-34-5211（代表）
[ホームページURL]
http://www.hirogaku-u.ac.jp/



東北女子大学

〒036-8530 青森県弘前市清原1-1-16
[TEL] 0172-33-2289（代表）
[ホームページURL]
http://www.tojo.ac.jp/



東北女子短期大学

〒036-8503 青森県弘前市上瓦ヶ町25
[TEL] 0172-32-6151（代表）
[ホームページURL]
http://www.toutan.ac.jp/



弘前医療福祉大学
弘前医療福祉大学短期大学部

〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1
[TEL] 0172-27-1001（代表）
[ホームページURL]
https://www.hirosakiuhw.jp/



放送大学
青森学習センター

〒036-8561 青森県弘前市文京町3
弘前大学コラボ弘大7階
[TEL] 0172-38-0500（代表）
[ホームページURL]
https://www.sc.ouj.ac.jp/center/aomori/

大学コンソーシアム学都ひろさき

〒036-8560 青森県弘前市文京町1（弘前大学社会連携部社会連携課内）
[TEL] 0172-39-3160　[FAX] 0172-39-3919　[E-mail] conso@hirosaki-u.ac.jp
http://www.consortium-hirosaki.jp/